

大学教育再生加速プログラム（AP）事業



Expanding Your Horizons プログラム  
2017－2020  
報告書

2020年3月  
福岡女子大学  
AP推進室

## はじめに

福岡女子大学は、平成 27 年度に「大学教育再生加速プログラム（AP）」のテーマⅣ：長期学外学修プログラム（ギャップイヤー）の実施校として、全国 12 校の中の 1 校として採択されました。採択期間は、平成 27 年度から令和元年度までの 5 年間で、福岡女子大学の事業では、「社会と学びを自ら結びつける力の育成」を目指した学外学修のプログラムの構築を掲げ、国内外の社会での体験を通じて、学生各自が大学での学びの意義を見出す「学びの気づき」から、専門的な学びを社会の中でどのように活かすかの実体験を通して「学びの習得・実践」へとつながるような長期学外学修プログラムを構築あるいは充実させるため、下記のような取り組みを、学内の関係する委員会・部会・センターにも協力していただき進めてきました。

- (1) 社会と学びを自ら結びつける力の育成を育成する長期学外学修プログラム（Expanding Your Horizons (EYH) プログラム）の開発と実践
- (2) 地域の課題を理解し、地域での学外活動を通しての学修を動機づける「地域共創論」の開講
- (3) 既存の 1 か月未満の海外研修の長期化や海外交換留学先の拡充
- (4) クォーター制の導入により、学生が長期学外学修の時間を確保しやすいカリキュラムの整備

以上の中で、新たに構築された長期学外学修プログラムである EYH プログラムは、本事業の中心となるプログラムで、学生は、国内外の企業・団体・自治体において、1 か月以上にわたる継続したインターンシップあるいはサービスラーニングの中で、地域の課題解決や地域活性化に向けての活動を実施し、学生自身がこれまで得てきた知識と現実世界を結びつけて考え、理解し、行動していくプログラムです。参加した学生の中には、応募した時点では長期にわたる学外学修ということで不安を抱いている学生もいましたが、学外学修後には、それぞれの学生が自分に自信をもち、そして、新しい気づき、考え、あるいは次の目標をしっかりと話すようになったと感じています。このような学生の変化は、EYH プログラムが「社会と学びを自ら結びつける力の育成」につながる教育プログラムとして機能していることを表しています。

本事業は今年度までですが、構築した EYH プログラムの内容が、本事業後も本学において、継続かつ進展して、本学における主体的な学びを実践できる人材の育成、そして「社会と学びを自ら結びつける力の育成」に大きく貢献していくことを期待しています。

令和 2 年 3 月  
AP 推進室長 池田宜弘

## 目次

はじめに.....	1
AP 事業の概要.....	3
Expanding Your Horizons プログラム.....	3
(1) EYH プログラムの目的.....	3
(2) EYH プログラムの概要.....	3
(3) 基礎科目「地域共創論」.....	4
(4) 海外・国内での活動.....	5
(5) インターンシップの受け入れ先.....	5
(6) 事前事後学修.....	6
派遣実績.....	8
(1) 2017 年度.....	8
(2) 2018 年度.....	13
(3) 2019 年度.....	27
EYH プログラム参加者アンケート.....	40
EYH プログラム年表 (2015-2020 年).....	44
大学教育再生加速プログラム (AP) 推進室.....	45
終わりに.....	46

## AP 事業の概要

学生が主体的な学びを獲得し、社会において真にコミュニケーション力やリーダーシップ力を発揮できる人材となるためには、学内の教室での学修だけでは不十分であり、学生が学外での多様な経験を通してその中で自分を成長させることが重要となる。国際文理学部では、学部設置当初からこの点にも注目し、学外学習を実施する体験学習科目や語学研修科目をカリキュラムに組み込むとともに、単位互換が可能な交換留学制度の充実も図ってきた。しかしながら、学外学修のプログラムに参加する学生数は、2013～2014 年で横ばい状態となり、学外学習プログラムの更なる充実が図られる必要性が指摘された。

このような背景のもと、文部科学省の大学教育再生加速プログラム（AP）テーマ IV：長期学外学修（ギャップイヤー）に採択され、国際文理学部において学外学修プログラムに関する取り組みを実施することとなり、EYH プログラムを開発するに至った。

## Expanding Your Horizons プログラム

### (1) EYH プログラムの目的

福岡女子大学における長期学外学修プログラムの開発と導入には、本学の抱えてきた問題点が出発点としてある。

本学の特徴として、グローバルな視点と多様な視点を獲得する多文化共生・理解、および主体的学びを身に付ける教育プログラムの推進をかねてより実施してきた。しかしながら、卒業時点において、社会が必要とする能力である、コミュニケーション能力、リーダーシップ能力の不足が指摘されてきた。それは、社会における実体験、自ら考え抜く場面に遭遇する機会の少なさに由来するという調査結果である。その結果を踏まえ、改めて整理した本学の描く育てたい学生の将来像は、以下の4点に集約される。

- ・新しい知識と経験を自発的に身につける
- ・これまで自分が得てきた知識と実際を結びつけ、さらに深い学びにつなげられる
- ・自分自身を柔軟に、どのような状況でも対応できるようになる
- ・自ら考え、行動できるようになる

それを実現するために必要な教育内容を含むプログラムをめざし、できあがったのが Expanding Your Horizons (EYH) プログラムである。

“Expanding Your Horizons” という言葉には、「新しいことを経験し、学ぶことにより自分の可能性を広げる」という意味がある。

この名前を持つ長期学外学修プログラムにおいて、言葉や文化が異なる環境で、新しい仲間と学び、働く経験を通して、学生自身の可能性をさらに広め、どのような環境でも柔軟に対応できるようになれるような機会を提供することを大きな目標として、プログラムの構築を図り、2017 年度より本格的に開始した。

### (2) EYH プログラムの概要

EYH プログラムは、基礎科目「地域共創論」と、海外でボランティア活動等を行いながら、実践的な学びを得る「サービスマーケティング」、海外の企業で1～2か月の就業体験をする「海外インターンシップ」、そして日本国内で、これまで学んできたスキルや時に語学力を生かして1～2か月にわたり就業体験をする「国内インターンシップ」といった長期学外学修、その前後の「事前事後学修」から構成されている。（図1）

地域共創論、事前事後学修、現地での EYH プログラムのサービスマーケティングやインターンシップは、学生の力を伸ばすだけでなく、大学に戻ってから何を勉強するべきか、就職するまで

に自分に必要なスキルがわかり、今後の学修計画を立てることも可能になることを期待してデザインした長期的な学修プログラムとなっている。

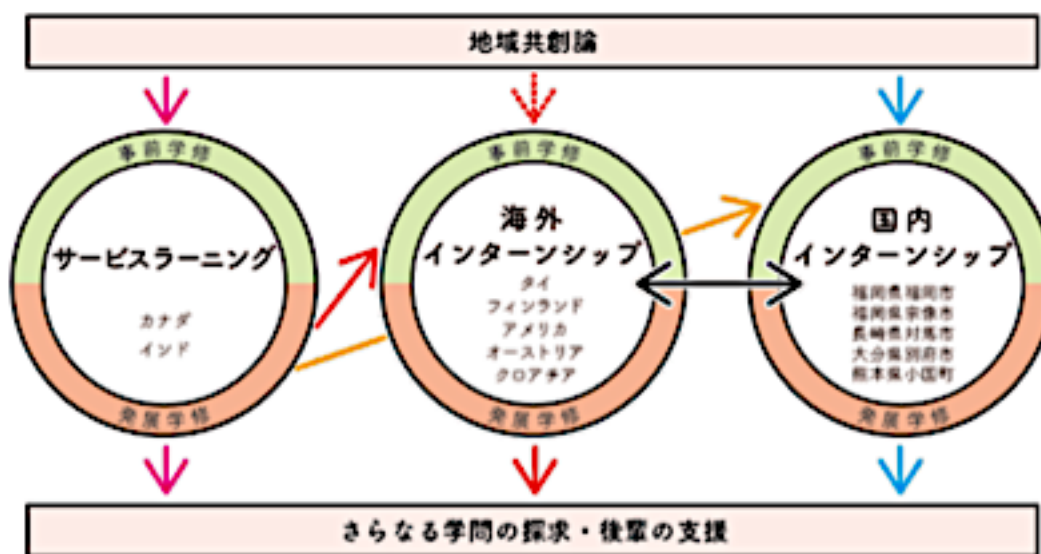


図1 EYHプログラム フローチャート

### (3) 基礎科目「地域共創論」

EYH プログラムに参加する学生の学外での学びと経験を最大限に活かすため、「地域共創論」という科目が設けられている。これは、学生の長期学外学修への動機付けとして、もしくは現地での活動から戻ってからの学問的背景の確認のために作られたものである。この科目が作られた背景には、地域を支える人材育成という地方大学のもつ大きな責任と役割がある。もちろん現地に出て、実体験から学ぶ学生を増やすことは大切であるが、仮に長期学外学習にいかなかったとしても、自らの居住する地域に関心を持つ学生が育つことは重要である。

「地域共創論」は、持続可能な開発（SDGs）に焦点を当てながら、身近な地域、もしくは日本だけでなく海外でも起きている問題を理解し、なぜそれが起こるのか、様々な角度から基礎的な理論を学ぶ科目である。また、この科目の特徴としては、ゲストスピーカーによる講演と野外調査を取り入れていることが挙げられる。

ゲストスピーカーを招いての講義は、様々な立場から地域のために活動している人々の話を聞くことで、インターンとして働くことや、大学卒業後のキャリアパスも含め、学生が外に目を向ける機会を提供することを目的として導入している。これまでの講演者は、フィンランドで、日本向けにデザイン製品を輸出する一方で、地域貢献事業を行っている起業家、長崎県対馬市で地域おこし事業を行っている公務員、大分県別府市においてアートで地域振興を行うNPOを運営している芸術家、熊本県小国町で温泉街の再生を地域の人々で行っている住民、地域おこし事業をいくつも手掛けてきたコンサルタント、福岡県庁の職員など、多彩な顔ぶれであり、インターンの受け入れ先で、地域に関連する活動をされている方を中心に、実際に現場で行われていることについて講演していただいている。

野外調査は、学生たちにとって身近な地域を、あるテーマに合わせて観察することで、見慣れた地域を別の視点から見て、新たな発見をしたり、再確認したりする経験を通じて、さらなる学問探究心を育てることを目的とする。またこの時、学生たちにとって身近なツールであるスマートフォンを用いて、調査データを収集するという取り組みを導入しており、インターンシップに行く時のヒントを与えている。これまでの調査対象地域は、福岡市の中心部の天神・

博多のエリアと、学生たちがよく行く場所を選び、観光やバリアフリーなどをテーマに調査を行ってきた。

「地域共創論」は、こうした取り組みを通じ、講義から理論を学ぶだけでなく、実際に自分たちの目で現地に行き、活動することの大切さを伝えるなど、学生たちの将来の学修へとつなげる役割を果たしたと言えよう。

#### (4) 海外・国内での活動

EYH プログラムでは、海外サービ斯拉ーニング、海外インターンシップ、国内インターンシップに分かれる。それぞれ、以下の通り異なる性質を有している。

##### ① 海外サービ斯拉ーニング

このプログラムは、受け入れ先は大学や国際的非政府組織（NGO）であるが、4週間から7週間、地域の人々とともに活動するプログラムである。学校の中だけで英語を学ぶのではなく、ボランティア就業体験や、高齢者施設、貧困者の支援、地域の小中学校訪問などを通じて、その地域社会で暮らす人々と話しながら、さらにコミュニケーション能力を高め、地域の現状を知ることができるという性質を有している。

##### ② 海外インターンシップ

海外でのインターンシップの受け入れ先は、海外に拠点を置く企業である。基本的に英語が話せることが前提となる受け入れ先となる。日本語が通じない新しい環境で、約2か月にわたり、主に英語でコミュニケーションをとりながら、インターンとして責任感をもって業務をこなすという大きなチャレンジが求められるプログラムである。

##### ③ 国内インターンシップ

日本の企業や、地域振興を行っているNPO、地方自治体などで、1～2か月の間、インターンとして働く。長期間にわたり受け入れ先で業務に携わることになるため、単なる就業体験にとどまらず、計画だけでなく実際にプロジェクトを実施するまで関わらずなど、学生でありながら、責任のある業務を任せられることも多い、学ぶことが多いプログラムである。

#### (5) インターンシップの受け入れ先

学生の受け入れ先については、このプログラムの大きな目的である、地域の抱える問題を知る機会につながることで、地域貢献の活動を行なっていることを基準として、受け入れ先を広げてきた。そして、44名の学生たちが、これまでとは全く異なる環境の中で、人々に助けをいただきながら、多くの学びを得ることができた。

この3年間で、学生たちに門戸を開いてくださった全ての派遣先に学生を送り出すことはできなかったが、学生のインターンとしての訪問の有無にかかわらず、多くの方々に心を砕いていただき、ご協力をいただいていたということをここに記しておきたい。

#### 【海外】

行先	受入れ先	受入れ先タイプ
フィンランド	0.7 design	企業
フィンランド	Orava Consulting	企業
フィンランド	Förlags Ab Lindan Kustannus Oy	企業
クロアチア	プーラ大学	大学
オーストリア	H.I.S. ウィーン支店	企業
カナダ	University of Winnipeg (CWE program)	大学・NPO

インド	Sangam World Centre (Community programme)	NGO
アメリカ合衆国	Trinity Valley School	学校
タイ	Full Advantage	企業

【国内】

大分県	NPO 法人 BEPPU PROJECT	NPO
熊本県	杖立温泉・チーム背戸屋	NPO
長崎県	対馬市	自治体
福岡市	株式会社コンテンツ	企業
福岡市	UR 都市機構 九州支社	企業
福岡市	福岡地域戦略推進協議会(Fukuoka D.C.)	団体
福岡市	福岡県 文化振興課	自治体
福岡市	福岡県 スポーツ振興課	自治体
福岡市	福岡県 ラグビーワールドカップ2019福岡開催推進委員会事務局	自治体
福岡市	福岡県 青少年育成課	自治体
福岡市	株式会社正興電機製作所	企業
宗像市	株式会社海千	企業
宗像市	宗像市役所	自治体
糸島市	スチームシップ	企業

(6) 事前事後学修

学外学修で、学生が様々な場面に遭遇し、その中でそれらの経験を生かして、自分の学びに結びつけていくためには、学外学修（インターンシップ）先の社会・地域における課題やその企業・団体等が実施している活動についての知識や理解（事前学修）が必要である。さらに、学外学修後に学修成果を振り返り、その成果を今後の学修や自分の成長に結びつけるためには、事後における学修活動が重要となる。このため、EYH プログラムでは、現地での活動とは別に、15 時間以上の十分な時間を事前・事後学修のために確保するようにしている。特に事前学修は、それぞれの研修先ごとに必要な学修の内容が異なるため、基本的には学外学修先ごとに分かれて実施している。このため、指導にはかなりの時間を費やすことになるが、4 週間以上の長期にわたる学外学修だからこそ経験して学べることを学生が十分に把握し、それぞれの研修先での体験を成果に結びつけていくためには、事前学修に時間をかけることは必要であると考えている。

実施している事前学修においては、2 段階の学修を設定している。第一段階は、インターンシップ先の地理・歴史・文化や現在の社会状況などについて、あるいはインターンシップ先の企業・団体などが行っている活動などについて調べ、それをまとめて発表を行う学修が実施される。次いで、第二段階は、事前に受け入れ先からインターンシップ中の課題として設定されているテーマがある場合は、その内容と関連する課題、もしくは学生が実施するインターンシップに関して事前に学んでおく、あるいは把握しておく方がよいと思う課題（テーマ）を学生ごとに設定し、それに関する調査研究および発表を行う学修が実施される。このように、インターンシップに行く前に、しっかりと事前調査・研究を実施することで、インターンシップ先で学生はより積極的な活動や取り組みをすることができ、その成果を得ることができると考えられる。

なお、将来的には、このような事前・事後学修活動の一部は、学生の主体的な活動として、すでに学外学修を実施した学生から、次に学外学修を行う学生へのサポートあるいはアドバイスという形で実施される仕組みが学内に構築されることを期待している。こうした学生同士の相互学習は、EYH プログラムをデザインした時点で、これからこのプログラムに挑戦しようとする学生に対して、事前学修の時にアドバイスするなど、後輩たちをつなげる仕組みとして取り入れているものである。

実際に本プログラムが動き出して、事前準備の段階で、前年に参加した学生から体験談を聞き、質問できる時間を設けたりした。中には、前年の参加者が、次の年の他の学生たちの実習中に自発的に現地を訪問し、現地で活動中の学生たちの相談にのる例も国内外で見られた。そうした経験を経た学生は、今度は逆の立場で、新たに参加する学生の相談に乗り、ノウハウを共有することが期待されるわけだが、大学側が期待する以上に、このプログラムに参加する学生によるつながりと知識と経験の好循環が生まれつつあるのを感じている。



## 派遣実績

EYH プログラムの開始は 2017 年度からである。EYH プログラムでは、応募すなわち参加ではなく、応募書類や面接を通して、本人が目的としているインターンシップが実施できるかどうかを、大学側とインターンシップ先の両方で見極めた上で、参加を認めるようにしている。

初年度の 2017 年度には、5 名の学生が最初の EYH プログラムの参加学生として選定され、長期学外学修に派遣することとなった。それに続く 2018 年度の EYH プログラムでは 19 名、2019 年度は 20 名の参加者を数えた。

EYH プログラムは、この 3 年でフィンランド、カナダ、クロアチア、オーストリア、インドの 5 カ国、国内は福岡県内は福岡市、宗像市、糸島市、熊本県小国町、長崎県対馬市、大分県別府市で行われた。(図 2)



図 2 2017-2019 年度 EYH プログラムにおける学生の活動地域

ここでは、この 3 年間にこのプログラムに参加した学生たちのインターンシップの目的及び、参加後の学生たちの声を紹介していく。

### (1) 2017 年度

2016 年から準備を始め、いよいよ EYH プログラムの初年度となった 2017 年度には、海外はフィンランドに 2 名、国内は福岡市内の企業 1 名及び熊本県小国町に 2 名の合計 5 名を派遣することになった。

派遣先	派遣期間	氏名	所属(当時)
フィンランド 0.7 design	7月30日~9月24日	松岡萌絵美	国際教養学科3年
フィンランド Orava Consulting	7月30日~9月24日	谷村聖奈	国際教養学科2年
福岡市 (株)コンテンツ	8月1日~9月15日	木下富喜	国際教養学科3年
熊本県小国町 チーム背戸屋	8月16日~9月23日	有田夏記 池田絵里	国際教養学科3年 国際教養学科2年

フィンランド 0.7 design 松岡萌絵美(国際教養学科3年)
(インターンシップの目的)
海外に自国のモノを販売する過程や、輸出する過程について学ぶこと。 元々、将来日本雑貨を海外に向けて販売できればと考えており、実際に本質的には業務をされている方と働けば何か将来をより具体的に考えることが出来るのではと思い、このインターンシップへの参加を決めた。

(プログラムを通じて学んだこと・成果)

<業務上の成果>

まず、ハンドメイドクラフトを日本に向けて販売するためのルートの一つは確保できたことが一番大きな成果だと思います。日本ではハンドメイド市場が大きくなってきているということもあり、誰でもハンドメイド作品を販売できる Creema というアプリを選びました。インターン終了時には、このアプリにおいて提供していただいた8作品を出品出来ました。

このアプリの英語のインストラクションを作成したことも関連して成果として挙げたいと思います。このアプリは日本の方が使うことを前提としているため、英語のページなどはありません。そのため、日本人ではない社長も使えるよう操作・出品・取引の仕方や、価格を決める際に使用する計算表を作成しました。実際にそれを参考に出品までの流れを確認してアプリケーションの引き継ぎをすることが出来ました。

<自分自身の成長>

良い意味で行動を起こす前に結果を気にしすぎなくなったように思います。結果を想像することは一概に悪いとは言えませんが、参加以前は気にしすぎていて行動に移るのが遅くなったり、最終的に行動に移せなかったりしたこともあります。

そのような以前の性格を考えると、結果を気にはするけれど「やってみよう」とインターン中に色んな事に挑戦できるように成長したなど思いました。



フィンランド Orava Consulting 谷村聖奈 (国際教養学科 2年)

(インターンシップの目的)

フィンランド・ケミオでコテージレンタルに関する仕事に従事し、海外の旅行スタイルや生活様式について学ぶ。また地域の特徴、魅力を知りコテージレンタルを通じた地域活性化について知識を得る。海外で働くという将来の目標や留学生活に向けて、PCスキルやコミュニケーション能力、問題解決力を養う。

(プログラムを通じて学んだこと・成果)

働く、ということのすることの難しさ、大変さ、やりがいについて身をもって学ぶことが出来た。一人でタスクに取り組み中で、孤独さを感じることもあったが、無事に乗り越え、忍耐力や問題解決力も身についたと考える。調査については、E-booksの出版という大きな目標を達成できたので、私自身にとっても、Orava Consultingにとっても



このインターンが非常に有意義なものになったのではないかと考える。調査をする中で、最終的に3つのプレゼンテーション資料を完成させることが出来た。子連れ旅行者の注意すべきポイントについての資料の翻訳、アジアのSNSに関する調査、人気のタグや人気の投稿に関して、英語で説明、資料をまとめることが出来た。コテージの作業に関して、最初はベッドメイキングをするだけでも時間がかかり、多くを任せてもらうことが出来なかったが、最終的に、コテージの準備に関して全てを私自身で終えることが出来るようになり、作業のスピードも大幅にアップした。イベントに関して、コテージのオープンドアに実際に参加させていただくことで、地域の人々のコテージに関する関心や地域の繋がりについて実際に学ぶことが出来た。また、マーケティングの一環として、調査でまとめた内容を実践するために、実際にOrava ConsultingのSNSアカウントを作り出すこと

ができた。同時に中国語や日本語で表記されているサイトにおいてほかのフィンランドコ  
テージ所有者が同じようにアカウント作成できるようなマニュアル本の作成についても同  
時進行で行った。ホームステイ中の生活に関しては、食事の用意、洗濯、掃除など家事も  
全て担当できるようになった。

福岡市 (株) コンテンツ 木下富喜 (国際教養学科 3年)

(インターンシップの目的)

広告や HP サイトを制作する過程を学ぶ中で、制作する流れだけではなく、クライアント  
とのやり取りや社員の方々同士のコミュニケーションの取り方、ヒアリングの仕方、ミー  
ティングの回し方等を含めて学ぶ。

(プログラムを通じて学んだこと・成果)

一番大きな成果としては、福岡女子大学の HP サイトにおける中学生・高校生向けの企画  
立案、提案に漕ぎつけることができ広報の方に前向きに検討するとのお言葉を頂けたこと  
であると考えている。

福岡女子大学に入る前段階で大学の学生生活が分かりづらいことや、入学前後での福岡女  
子大学に対する印象の変化は常々感じており、オープンキャンパスのスタッフとしても印  
象の変化や学び、体験したことはより強く高校生に語っていることの一つでもあった。普  
段、この思いを直接的に高校生や保護者の方には伝えることはできていたが、サイトの提  
案をする機会はなかったため私にとっても企画をすること、思いを形にすることを経験す  
ることのできる非常に貴重な経験であった。社員の方との対話や、多くの大学 HP サイト  
を比較し、見る側にとって見やすいサイトや、高校生にとって必要な情報、親切な表示の  
仕方を研究した他、自分自身の受験期を思い出しながらターゲットや強く押し出すポイント  
などを決めていくなどの多くの過程を経た。当初は行っている作業と完成像が結び付き  
にくいこともあったが、「高校生向けのサイト提案」という大きなテーマに向かって多角  
的に資料を作成することが後に、アイデアが浮かばない時や、方向性がぶれそうになっ  
た時に立ち返る土台となっていたことを実感した。

この「中学生・高校生向けのサイト」の企画立案を通じて新たに「提案」型のプレゼンテ  
ーションを体得することができたこと、より納得してもらう資料作りや話し方を何度も再  
考する経験、0 からの企画の立ち上げを企業レベルで実際に経験できたことは私自身にとって大きな財産となっ  
たほか、社員の方々が単なる研修ではなくビジネスの一つとして企画案を一生懸命指導して下さったことでより  
現実的に提案を企画書という形に起こしてプレゼンテーションできたことがこのインターンシップでの最大の成  
果であると考えている。



熊本県小国町 チーム背戸屋 有田夏記 (国際教養学科 3年)

(インターンシップの目的)

学びたいことは、実際にモノづくりをしてどんな過程を経てモノができていくのかという  
ことです。自主課題は、国内外の観光客に関わらず、ジオパークの自然を楽しんでもらえ  
るように見どころをまとめることです。

また研究したいことは、メディアから考察した杖立温泉のイメージやアピールポイントの  
明確化です。

(プログラムを通じて学んだこと・成果)

まず、モノづくりに完璧はないのだなと学びました。インバウンド対策ツール作成では、主に会話帳に取り掛かりましたが、一枚の紙で表現できる量には限度があるので、使用者ごとに分けた会話帳を三個作りました。また、会話帳は理屈ではなく実際に使ってみてよし悪しが分かると思うので、最終成果発表後も改善しなければならない部分がありました。考えて努力しても必ず評価される訳ではなく、悔しいし難しいなと思いましたがこれを含めてモノづくりの楽しさなのだなと分かりました。また、ヒアリングの際に多くの要望を聞きましたが、全てを入れることはできません。そのため情報の取捨選択の大切さを学びました。



SNS を利用した観光案内を作成しましたが、観光案内を作ってから利用拡大するための対策に時間をかけることができませんでした。作ったことで満足せずに、作ったものをどう広めていくかという次のステップまで見越して建設的に行動する大切さを学びました。また、SNS で観光案内を作成する際に、人気の投稿は綺麗で多色な画像を使っていたので参考にしました。投稿してからすぐにほかのユーザーがお気に入りしてくれたので、多くのイベントを通して、杖立温泉をより客観的に見るできるようになりました。イベントを通して様々な方と出会い、いろいろなお話を聞くことができたので、杖立だけを見るのではなく、他の地区を知ることで比較対象ができ、より客観的に杖立の独自性が分かるようになりました。客観性の大切さを学びました。

最終成果発表で私たちの行ってきた活動をそのまま伝えるのではなく、まずは杖立の方々にインバウンド観光の重要性を伝えて私達の活動(インバウンド対応のツール作り)について紹介しました。町おこしを通して感じたのは、その地域に住んでいる方々に外部が「こうした方が良い、ああした方が良い」と言うだけでは町おこしには繋がらないということです。つまり、地域に住んでいる人たちの意識がどれだけ変わって、本人達が自主性を持って活動できるようになるのかが町おこしなのだ学びました。杖立温泉の魅力やアピールイメージの調査は、事前学修で至った考えを踏まえて論理的に杖立温泉としてのアピールイメージの明確化が必要であることを伝えました。そして、Instagram の例などを挙げながら外部の人にとっての杖立温泉の魅力を伝えました。つまり、ただ提案をするのではなく、意識が変わるようなきっかけ作りとして地域振興を行うべきだと学びました。そしてこの研修を通して地方の抱える、少子高齢化や過疎問題等を身近に感じ、決して他人事ではないと思うようになりました。同時に、今までは学校という狭いコミュニティばかりで過ごしていて実感が湧きませんでした。自分自身も社会を作る一員なのだと感じました。

杖立では続けていくことの大切さを学んだので、地域社会においても自分が社会の一員ということを忘れずに、関わり続けていきたいと思えます。

熊本県小国町 チーム背戸屋 池田絵里 (国際教養学科 2年)

(インターンシップの目的)

過疎地域の実状を知るために住民の視点、生活環境に寄り添いながら振興に携わる組織の在り方や意識を感じ取り、町おこしに重要な姿勢を学びたい。

難しい仕事であっても、最後まで責任をもってやり抜くスキルを身につけたい。

移住をした方が、移住を決定する際に感じた小国町もしくは杖立温泉エリアの魅力について調査したい。

(プログラムを通じて学んだこと・成果)

温泉街ということもあり、旅館等では1日の過ごし方が違うため、ヒアリングするタイミングを間違えると、迷惑を掛けてしまうということを研修初期に学んだ。それ故、時間短縮を図るために予め質問項目を用紙に書き、回答所要時間を伝えてから聞き取り調査を行うようにした。地域社会と関わっていく際には、目標を達成するまでの過程で起こりそうな困難を想定し、どうしたら超えられるのか自己の行動プランを立てるのが初期の実務だと学んだ。

更にヒアリングを重ねると、件数の分だけ情報を得られ、多角的な考えや案が出揃う。しかしそれと同時に段々町の実情を知る故、第三者としての外部的視野が狭まるのを体感しており、少し危機感があった。外部者でありつつも、一か月間以上過ごし、町に馴染んでいくしかないため、均衡を保つのが非常に難しいと学んだ。

地域の振興に携わる多くの人たちの考え方を知り、自分なりに振興の火種となるきっかけ作りのために、コミュニケーションを図っていく中でタスク業務に必要な要素を見極め取捨選択することに努めた。しかしながら、ある程度、振興に携わる方々を含む、町の方々の中に、町の今後を見据える姿勢に統一性がないと、リクエストに振り回されるという負の面もあった。それ故、多くの情報、リクエストの中から取捨選択する際には、理由・根拠を聞き出しながら、こちらの理解に誤解が生じていないか確認をする作業の重要性も学んだ。

私自身は研修前からみちくさ市に興味があり、SNS 上での発信を度々チェックしていた。投稿では、物販店舗、販売物、献立決定のお知らせや「開催まで残り〇日」、「開催しています」、と当日の朝までも発信しており、一回一回の投稿に工夫が見えた。実際に当日お手伝いしてみると、豊かな自然の中で朝食を食べて過ごすも、お土産目当てでも良く、早朝の気持ちの良い時間の過ごし方に対する幅広い価値観が生まれているのだと感じた。

実際に以前からみちくさ市に携わっている学生に話を伺い、みちくさ市によって温泉や、鯉のぼりだけではない杖立温泉を知ってもらう、更なる人が集まるきっかけ・活気作り、の朝市を目指していると学んだ。また、当日スタッフとして動いていく中で、終了後の事を念頭に置いて取り組むのが重要だった。終了後に次回に向けての反省会を行うとのことだったので、回転が遅いと感じたらメモに残したり、手が空いた際にアンケート用紙のコメント欄をチェックしたりしながら動いた。反省会議で意見を伝えることができるのは勿論の事、当日の動きの中で変更できる点もあるかもしれないと思い、注意する姿勢を持つことを心がけた。



(2) 2018 年度

2018 年度は、前年より派遣先も増え、志願者も多くなり、全体で 19 名が参加した。多くの学生は夏休みを利用してプログラムに参加したが、中には第 3 クォーターを休んで参加するなど、この年から導入されたクォーター制を生かして、長期にわたりプログラムに参加した学生もいた。

派遣先	派遣期間	氏名	所属（当時）
フィンランド Förlags Ab	8 月 15 日～10 月 19 日	田中日菜子	国際教養学科 3 年
オーストリア H.I.S. Austria	8 月 1 日～9 月 21 日	荒木優花	国際教養学科 2 年
カナダ ウィニペグ大学 CWE プログラム	7 月 1 日～8 月 22 日 19 年 1 月 5 日～2 月 25 日	本田陽子 今針山里菜 大崎恵実 古賀茜 豊永千聖	国際教養学科 3 年 環境科学科 3 年 環境科学科 3 年 環境科学科 3 年 国際教養学科 3 年
インド Sangam World Centre	8 月 24 日～9 月 25 日 19 年 2 月 8 日～3 月 11 日	小田麻希 三重野藍 久保百香 隈江直美	国際教養学科 2 年 国際教養学科 2 年 国際教養学科 2 年 国際教養学科 2 年
クロアチア プーラ大学	9 月 24 日～12 月 22 日	森永佳乃 沖西愛花	国際教養学科 3 年 国際教養学科 3 年
熊本県小国町 チーム背戸屋	8 月 6 日～9 月 16 日	岡田麻未 渋谷実穂 須藤みのり	国際教養学科 2 年 国際教養学科 2 年 国際教養学科 2 年
長崎県対馬市	8 月 2 日～9 月 6 日	佐藤歩	国際教養学科 3 年
福岡県 福岡県庁	9 月 3 日～11 月 2 日 8 月 20 日～10 月 19 日	井上公子 花田唯	環境科学科 3 年 環境科学科 3 年

フィンランド Förlags Ab Lindan Kustannus Oy 田中日菜子（国際教養学科 3 年）
（インターンシップの目的） 地域の魅力を発見し、その地域に住んでいる人にも、住んでいない人にも伝えていく仕事について知る。そしてインターンを通して人見知りな性格を少しでも変える。フィンランドに住んでみて、なぜフィンランドは世界一幸福な国に選ばれたのかを知る。
（プログラムを通じて学んだこと・成果） はじめての場所で行動することは勇気のいることだが、その地域の魅力を知りたいと思って、何事にも興味、関心を持って、積極的に行動することが重要だった。そして、その地域で出会った人との交流を深めていくことで、新しいことを知れたり、体験出来たりすることがある。地域社会に関わっていくことは、人との交流も大切である。地域の人に教えてもらったことと、外からの視点を合わせると、その地域の魅力を発見でき、住んでいる人にも、住んでいない人にとっても地域の魅力を分かりやすく伝えることができることを学んだ。 フィンランドでの生活を通して、福祉制度や教育制度が整っているのはもちろんのこと、自然と触れ合う時間が多かったり、余暇時間を有意義に使ったりするなど、ライフスタイルにも理由があることが分かった。フィンランドに住む人は、趣味を持っている人が多く

て、学校や仕事と余暇時間をきっちり区別して日々の生活を楽しんでいる人が多いなと感じた。

キミト島での2か月の生活の中で、たくさんの人と知り合い、たくさんの貴重な経験をする事ができた。取材をしていくうちに、はじめは初対面の人と話をすることが苦手だったが、人と話をすることが楽しいと思うようになった。実際にこのインターン中に、新しく出会った人々に多くの場所に連れて行ってもらい、様々な体験をすることで、自分の興味の幅を広げることができた。キミト島を知るにつれて、また来たいと思える場所になった。キミト島を多くの人々に知ってほしいと思う。また、インターン先の社長に、「普通のことだと思って目を向けていなかったことが、魅力的なことだと気づくことができたよ」と言ってもらえることができた。



オーストリア H.I.S. Austria Travel GmbH 荒木優花 (国際教養学科 2年)

(インターンシップの目的)

1. 旅行会社の裏側を知り、どのような戦略で旅行を提供しているのか、旅行業界の仕組みについて学ぶ
2. H.I.S.流の旅行企画の理念を吸収する

(プログラムを通じて学んだこと・成果)

旅行会社には部署がいくつもあり、パッケージツアー、オプションツアー、音楽鑑賞デスクなど、様々な部門に分かれて手配を行っている。また、催行会社との協力も多く、H.I.S.のみで用意しているわけではなく、先方との交渉が大切であった。

業務としては、ビジネスメール(日本語、英語、ドイツ語)の書き方や、企画のプロセスを学ぶことができた。

ホテルやガイドとのやり取りをしていると、評価の高いところやガイドさんほど対応が丁寧であったり、謙虚な姿勢であったことから、人間性やホスピタリティが重要であることを改めて実感した。

インターンシップを通じて、序盤ではあるが、目標であった、旅行会社の「裏側」を垣間見ることができ、実際に1つ1つのツアーがどのように用意され、お客様へ提供していくのかを学べた。これまでぼんやりと興味を持っていた旅行業界であったが、実際に働くことによって、より具体的に業界について学ぶことができ、予想と違ったことも知ることができて貴重な体験ができた。

常に仕事が絶えることなく、非常に多忙であったが、仕事を苦痛に感じることなく、スタッフの方に教えていただきながら、スムーズに業務をこなすことができたと思う。初めは名前のスペル間違いや小さなケアレスミスを自ら気づくことができず、担当の方に二度手間を負わせてしまったことがよくあったが、徐々に自分の間違えやすいポイントをつかみ、事前に防ぐ工夫をこなせるようになり、ミスがほとんど無くなった。

自らお手伝いできることがないか、常に積極的にお仕事を求めている姿勢を支店長に非常に評価していただいた。

もっと改善したかったことは、時間の使い方である。普段の業務を振り分けてくださるスタッフの方々は、私がオプションツアーの企画という課題があることをご存知でなかったため、特に半ばの繁忙期では事務業務ばかりで日々が過ぎていき、なかなか自分の課題



に集中して取り組むことができなかった。事前にスタッフの方々とも私の課題を共有していたらよかったかもしれない。また、企画のアドバイザーである支店長に相談する機会のきっかけを探るのが難しかった。後半に急いだ形で課題に取り組んだので、一番初めに課題への取り組み方を相談し、一緒に計画を立てておけばよかったと思う。

カナダ ウィニペグ大学 CWE プログラム 本田陽子（国際教養学科 3年）

（インターンシップの目的）

英語力、特にスピーキングの能力を高めるとともに、実際に働くという経験を通して海外での接客や対応の仕方を学ぶことです。また、カナダでの生活を通して日本との文化の違いを学ぶことも目的です。

（プログラムを通じて学んだこと・成果）

4週間の英語研修では、英語を話すことだけでなく、話せる知識を持っていることも重要だと学びました。他の学生とディスカッションを行う時にも、自分の知らないことは全く話すことができなかったという経験もありました。

3週間の就業体験では、働いたお店が地域社会とのつながりを大切にしていることを学びました。パンを作る際の材料を、全て地元のものを使うことによって、ウィニペグの町を活性化させたい、という想いがあるお店でした。お客さんとのコミュニケーションも大切にしており、地域に愛されているお店だと感じました。日本ではあまりこのようなお店は多く見かけないので、地域振興がどのようなものなのか学びました。

この7週間のインターンシップを通して、英語力は参加前よりも上がったと感じています。特にスピーキング、リスニング力は授業や就業体験、ホームステイでの生活を通して自然と高まりました。

また、日本とカナダの文化の違いも学ぶことができ、特に就業体験を通して働き方の違いも感じるようになりました。働いたお店ではお客さんと従業員の距離がとても近く、お互いの関わりを大切にしていることがわかりました。



カナダ ウィニペグ大学 CWE プログラム 今針山里菜（環境科学科 3年）

（インターンシップの目的）

- ・英語を使って働くことで、英語力を鍛えたい。
- ・海外の文化に触れて、日本との生活の違いを知る。

（プログラムを通じて学んだこと・成果）

学校生活では本当にたくさんの方の事を教えてもらいました。特に午前の授業では、先生がとても親切で日ごろの生活からうまれた疑問を全て聞いてくださり教えてくれました。カナダについて最初の1、2週間は本当に慣れないことばかりで、先生が教えてくれることでとても安心することが出来ました。レストランでの英語を授業で学んで、実際にレストランへ行ったりもしました。日々の生活で使える英語をたくさん学ぶことが出来たように感じます。



就業体験では、学校とは真逆でアウトプットの方が多かったです。お年寄りとお話する



のと、子どもたちと遊ぶのでは使う英語がかなり違いました。また2回参加したハーベストでは、本当にたくさんの方が食料を受け取りに来ました。日本でこういった活動に関わったことがなかったのでとても新鮮で、新しい経験が出来てよかったです。

学校生活では、宿題があったりテストがあったりしたため、かなり集中的に勉強することが出来たと思います。実際に英語圏で生活することで、勉強した内容をそのまま活かすことが出来るというのがとても楽しかったです。自分の英語力では補えないことも多々ありましたが、それも今後もっと英語を勉強したいと思える良いきっかけになりました。

就業体験先では、スーパーバイザー、スタッフの方々にとっても恵まれていて充実した3週間を送ることが出来ました。この施設にはカナダで働きたい人向けの授業も行われていて、スタッフの方々は英語を教えることにとっても長けている方ばかりでした。活動を通して英語を使いながら間違った部分は直してくださるので、本当に勉強になりました。また英語の勉強だけでなく、様々な国の人、様々な年齢の人と触れ合うことで、たくさんのお話を聞くことが出来ました。

カナダ ウィニペグ大学 CWE プログラム 大崎恵実（環境科学科3年）

（インターンシップの目的）

カナダの文化を学ぶ。英会話のスキルを身につける。環境問題について知る。

（プログラムを通じて学んだこと・成果）

このプログラムで学んだこと、気づいたことは大きく2つある。

1つめはゴミについてである。環境問題について知ることが1つの目的だったが、ゴミ関連について日本との違いをいくつか感じたため、ゴミをテーマにした。ウィニペグに来てすぐにゴミ箱の多さに驚いた。日本では、ゴミを捨てたくてもゴミ箱を探すことに一苦労するのだが、ウィニペグには数え切れないほどゴミ箱がある。ダウンタウンにある主要なバス停の近くにはもちろん、住宅街のバス停付近にも設置してある。建物内にもいたるところに設置されている。だからといって町中や施設が綺麗かというとはそうではない。ゴミ箱がなくポイ捨てしてしまうより、設置されていることによって町中も綺麗になりそうだが、バス停やバスの中はゴミがよく落ちていた。ただゴミ箱が多ければ、ごみのポイ捨てが減るわけではないということを感じた。



2つめは多様性である。Diversity というワードは何回も耳にした。多様性が大事だということは知っている。だが、ウィニペグに来て自分が思っていたよりも知らなかった、関心を向けられていなかったことに気がついた。多様性は色々な面で感じる事ができた。Sam's Place ではベジタリアンのメニューを取り扱っていた。外食をしたとき、ほとんどのお店でベジタリアンやビーガンのメニューがあり、その上種類も豊富だったように思う。カナダに行くまでは、ベジタリアンやビーガンという言葉聞いたことはあっても身近に感じることはなかった。カナダではそれらに対応することは当たり前のように感じた。私は日本でそれらに対応しているカフェやレストランを見たことがない。もしくは、気にとめていなかったのかもしれない。今の日本では必要ないと思う人が多いのかもしれないし、私はベジタリアンやビーガンではないので、無くて困らない。しかし、これから、日本でインバウンドがより活発になると考えられるので、多種多様な食生活に対応できる状態であるべきだと思った。

学校で出された課題は自分なりにこなせていたと思う。英語力に関しては、自分から話

しかけることが徐々にできるようになった。ホストマザーからも、英語のレベルが少し上がったと言ってもらえた。職場でのタスクも、周りを見て行動できるようになっていったと感じる。時間がかかってしまうこともあったが、お客さんの求めていることに対応できるようになった。自分の研究結果に関して、当初の主旨とずれが生じていたと思うが、日本とカナダの違いに敏感になり、日本のよさ、カナダのよさをそれぞれ感じる事ができた。逆に、足りていないもの、改善点も見えてきたため、さらに環境について考えるきっかけになった。

カナダ ウィニペグ大学 CWE プログラム 古賀茜（環境科学科3年）

（インターンシップの目的）

大学での授業に参加し、より実践的な英語を学ぶ。ウィニペグにある施設で就業体験を行うことによって、カナダの働き方や文化を体験する

（プログラムを通じて学んだこと・成果）

ウィニペグ大学の研修では、自分と同じように英語を学びに来た学生と一緒に勉強することができ、とても刺激になりました。毎日会話をする中で、とても勉強になりました。

上手く伝えることができるか不安でしたが、とりあえずやってみようと考えようになりました。自分の話で盛り上がりすぎたり、人の話を聞いて理解できたりした時はとてもうれしかったです。大学の研修では、日本人の学生とは一緒に活動せず、他の国の学生と活動するよう心がけていました。その結果、香港と韓国、フィリピン、メキシコ、ウクライナの学生と仲良くなることができました。他の国の学生は日本の文化に非常に興味があると言っていて、たくさん質問をしてくれました。週末は仲良くなった学生と動物園や、雪まつり、博物館へ行ったり、パーティーに招待してもらったりと充実していました。また、ホストマザーとはコンサートやミュージカル、ショッピングに行き、カナダでしか味わえないようなことを体験させてもらいました。



就業体験では、より実践的な英語を聞くことができ、とても勉強になりました。今まで勉強したことがないような単語やイディオムを知ることができ、毎日新しい発見がありました。子供たちの英語が聞き取りづらく苦戦することもありましたが、毎日笑顔で挨拶することで次第に打ち解けることができました。

カナダ ウィニペグ大学 CWE プログラム 豊永千聖（国際教養学科3年）

（インターンシップの目的）

英語力の向上、カナダのワークスタイルを学ぶこと、働く上で必要なことや大事にしなければいけないことを学ぶこと、カナダの節水、節電の取り組みについて知ること

（プログラムを通じて学んだこと・成果）

自分の意見を持ち、それを伝える機会が多かったため、常に考えを持ち、言葉に表すようにすることの重要性を学んだ。上手に伝えることが出来なくても、自分から進んで話しかけることで、自分の主張が通せるし、人とながりを持つことが出来る。カナダは多様性に富んでおり、違いが当たり前になっていた。人種はもちろんのこ



と、宗教、性別、食習慣、年齢、障がいの有無などさまざまな違いを認め合っていた。多様性が進んでいる分、自分と異なる点をもっている人と接するときは、敬意をもって相手に失礼のないようにすることはかなり重要なことであると学んだ。また必要以上に意識して気を遣いすぎること(特に障がい者に対して)は失礼に当たるため、どのような行動が正しいのか考えることは必要であると思った。また小さな事や何気ないときでも、挨拶やお礼を言うことでとても気分が良くなると思った。カナダの節水、節電対策は特に節水に力を入れていた。まず洗濯は週1で行い、シャワー時間も家庭によりさまざまだったが、8~15分が一般的だった。また職場では食器の洗い物が多いため、水をためそこで洗うようにしていた。水を使うのは最後の仕上げすすぎの時で最小限しか使っていなかった。節電対策はこまめに電気を消すようにしていた。

インターシップを通して、以前に比べて自分の意見を発言するようになったと思う。発言することに対してより積極的になれた。また発言を求められることが多かったため、自分の考えを持つようになったり、「自分だったらこうする、自分なら〜だ」というようにとにかく考えるようになった。

初めて一人で飛行機に乗ったり、一人で行動することが日本よりも多く、度胸がついたように感じる。

授業で多様性について学んだり、職場でいろんな人々を見て触れあったため、多様性についての理解が深まったし、接し方について少しではあるが知ることが出来た。中毒者の人々なども施設に来ていて、今まではただ単に怖いという意識しか持っていなかったけど、理由があって中毒に陥って適切なケアが必要で、話してみれば気さくに返事をしてくれたりして、彼らに対する意識が変わった。

インド Sangam World Centre 小田麻希 (国際教養学科 2年)

(インターシップの目的)

発展途上で支援関係に興味があるため、実際の現場がどのようなものなのかを自分自身で体験すること。また、私の働く Tare Mobile Creche では児童労働を禁止しているため、それをどのように阻止しているかということ。

(プログラムを通じて学んだこと・成果)

インドの私が滞在したプネー市があるマハラシュトラ州では学校の学費や制服が無料なうえに給食もタダで支給しているため、たとえ貧しくても子供たちは学校に行くことができる。さらに Tare Mobile Creche でも朝は牛乳やバナナなどの軽食、昼はお米を使ったカレー、そして帰宅前にスナックを支給している。そのため親は子供の食事を確保するために学校に行かせ、また子供の分の食費がかからない、仕事が終わるまで見てくれるため子供が家計のために働かなくてもいい環境にあるのではないかと私は考える。結果としてこのシステムが児童労働の防止につながっているだろう。また、私が想像していた支援の方法は何かものを与えて暮らしを少しでも豊かに、先進国の生活に近づけるようなやり方だったが、今回のインターシップを通して、そうではなくその地域を考慮して、物資的な豊かさよりも経験的な豊かさを与えることではないかと感じた。つまり、幼いころから自分とはバックグラウンドや国の違う人々と交流し、それぞれの文化をたくさん知ること、尊重できるようにすることである。



今回のインターシップで子供たちに日本の文化を伝えられたのではないかと思います。しか

し、ただ自分の文化を伝えるだけでは押し付けになってしまうので、私も積極的にインドの伝統的なダンスや子供向けの歌、アート、言語を学んだ。しかしただ自分の文化を伝えるための上からで一方的なコミュニケーションはただのその人のエゴであり、押し付けになってしまうため私も積極的にインドの伝統的なダンスや子供向けの歌、アート、言語を学び、互いに教えあう・学びあう関係の構築を心掛けた。これのおかげで言語はなくともコミュニケーションはとることができたのではないだろうか。

また、英語の必要性と英語への依存の怖さの両方に気づくこともできた。前者の英語の大切さは Sangam 内の公用語は英語であるため、英語が話せることが前提条件であったと言ってから気づき、またもっといろいろなことを話したい、何を言っているのかを理解したいと何度も強く感じるがあった。よって私は英語は様々な国の人と交流するうえで大切な役割を担っていると感じた。一方で英語が全世界で誰にでも通用する言語であると勘違いすることは大変なことを引き起こすということも思った。私は英語学習者であるため、このことに気づくことができ、英語が話せることがすべてではないと思えるようになった。

インド Sangam World Centre 三重野藍（国際教養学科 2年）

（インターンシップの目的）

このプログラムの内容は「NGO にてスラム街の地域開発に携わる」ことでしたが、私はスラム街についてメディア上の姿しか知らなかったため、自分の目で実情を知りたいと思いました。そのうえで彼らに自分がどう関わることができるのかを考え、ただ「知った」ということで終わるのではなくどうすれば相互に影響を及ぼせるのかということについて考えることを目的としていました。

（プログラムを通じて学んだこと・成果）

Deep Griha で触れ合った子供たちは施設の隣に位置するスラム街から来ていました。私はスラム街に住んでいるということは学校にも行けない、食べるものもない、綺麗な服も着ることができないといったことが当たり前なのではないかと思っていましたが、プネーが位置するマハラシュトラー州が授業料を無償化しているためにすべての子どもが学校に行けていたり、Deep Griha に来る子供たちは新品の服を買ってもらったりお菓子を握っていたりと、多くの予想とは異なる状況を目にすることにより考え方は大きく変わりました。彼らは確かに多少の助けを必要としているかもしれませんが、彼ら自身でやりたいことをやり何かを楽しみながら生きるためのすべを持っており、他者が「援助」という形で介入する必要はないのではないかと思います。援助よりも何よりも彼らとともに同じ時間を過ごすこと、これが最も大切なことだと私は思います。この経験から本当に誰かのために何かをしたいと思うのであればまずはその人の置かれた状況、そしてその人自身を理解しなければいけないと強く感じるようになりました。



インド Sangam World Centre 久保百香（国際教養学科 2年）

（インターンシップの目的）

サンガム内ではリーダーシップを持っている人が日頃どんな活動をするのかを知り、自分の今後の生活に生かす。サイトでは、社会的に困っている人に対して自分が出来ることは何かを考える。

(プログラムを通じて学んだこと・成果)

サンガム内では、世界各国でガールスカウトとして活躍をする人たちと過ごして、彼女たちは何かアクティビティを計画することにとっても長けているなど感じた。とくに、地域のガールスカウトとボーイスカウトがやってきたときには、多くの意見を出し合って子供たちが楽しめるアクティビティを作り上げ実行に移し成功させるのは、社会人が企画を立てそれを実行していくそれに似ている気がするので、彼女たちに混じって活動することはもしかすると社会に出て役に立つのではないかと思った。そして、世界中の人の考え方を知り、共有することは、今までの考え方が正しいのかそうでないのか考えさせられるいい機会になるので、いろいろな国の人、海外でなくとも違う分野で働いている人と関わりを持つことは自分にとっていい影響があると身をもって感じた。また、サイトにはいろいろなアクティビティを持っていったが、少し難しいと「やらない」と断られてしまうことが多く、自分のやりたいことは押しつけるだけではいけないのだと感じた。相手が出来ることを把握して、その範疇でできるだけ楽しいことをするのはとても難しかったが、慣れてくると少しずつ出来ることが増えてくるのがわかった。それ加えて、精神疾患の重度は人によって違い、軽い人が重い人を邪険にすることが幾度か見受けられたので、いろいろな人が入り交じっているグループで一つのことを行なうには配慮が必要だと感じた。



私は一度「こう」と思ったら意見を変えないことが多かったが、自分が考えていることが常にベストなわけではないということがよくわかった。他の人の意見、特にその分野での先輩の意見を取り入れることでよりいい物が出来ると感じさせられることが多かった。今までは自分だけでどうにかしようとしてきたが、そうするのではなく、人に頼って助けてもらうことができるようになった。また、ワールドシンキングデイを通して、インドの子供は自分の意見をそれぞれがはっきりと持っていると感じたのだが、日本人だからできないということは絶対はないので、わたしたちも回数を重ねるのみだと感じられた。一か月間、自分の意見をしっかり持つことを一つの目標としてやってきたが、この短期間でも自分の意見を以前よりはっきり言えるようになった気がするので続けていきたい。

インド Sangam World Centre 隈江直美 (国際教養学科 2年)

(インターンシップの目的)

国際協力に興味があるので、貧困地域における女性や子供の立場、またその国の制度などを学びたい。それらを自分の目で見て、考え、次のアクションに移したい。

(プログラムを通じて学んだこと・成果)

業務から学んだことは主に2つあります。

1つ目は、私が訪れた地域での子供や女性の立場とそれらを取り巻く環境です。インドではカーストや金銭的余裕に左右されないようにと教育が無償化されています。また、公衆トイレでの女性に対するレイプが多発していることから、ある観光地の外には2ルピー程を払うことで女性が安心して使用できるバス式トイレの設置も行われていました。私がインターンを行なったサイトでは、子供たちの親は1か月にわずか10ルピーを納め、子供たちに支給される



食事は全て寄付であるという話を聞きました。また、サイトまでの道路が開発中だったのですが、手作業で砂利を敷いている女性の姿を何度か見かけました。共働きの家庭で子どもを安心して預けられる施設があるのは女性の家庭からでる助けに十分に役立っているのではないかと思います。

2つ目は自分の中での貧困の定義です。私はこれまで物質的に、あるいは金銭的に恵まれていないような人々のことを貧困であると考えていました。しかし、サイトの子供たちは貧困を微塵も感じさせない目の輝きを持っていました。またものに恵まれてないからこそ、当たり前私たちに私たちの身の回りに溢れている紙の大切さにも気づかされました。そして路上には想像していた通り、生きるのに精一杯にお金を求めてくる人もいました。ただ、子どもたちの無邪気な雰囲気や目の綺麗さは同じで何が正解かはわからないのですが、自分に何かできるのではないかと考えるようになりました。

私はこのインターンシップを通じて日本には経験できないことを多く経験しました。道端や電車の中で必死にお金を稼ごうとしている人、貧しいながらも目をキラキラさせてチャレンジする子供たち、舗装されていない道路、車線が意味をなさない車道、壁の全くない温かい人付き合い、など目にするもの全てが新鮮で、なんでなんだろう、どんな人なんだろうとよく考えるようになりました。異文化に触れたことで私の価値観は大きく広がりました。

価値観が大きく変わったことで、あらゆることに好奇心を持つようになり、これまで意味を見出せなかった学習に対する意欲も高まりました。また、そうしたことをより深く学ぶには語学力も大事だということに気づいたので、語学力向上にも力を入れていきます。

#### クロアチア プーラ大学 森永佳乃（国際教養学科 3年）

##### （インターンシップの目的）

日本語教員資格の取得を目指す上で、大学の講義で得られる知識だけではなく、実際の教育現場を自らの目で見て日本語教育の課題や問題を学ぶため。

自分よりも多くの知識を持つ現場の先輩方や教授、講師が実際に日本語学習者に教育を行っている場面を見て、良い教育法を吸収するため。

クロアチア(ヨーロッパ)で日本語教育が必要とされているのか、生徒はなぜ日本語に興味を持つのか、実際に現地の生徒に聞き取り調査を行うため。

クロアチアでの日本という国への認識、日本との文化(食・生活・ポップカルチャー)などの違いについて学び、発信することでそれぞれ互いの国について知識を深めてもらうため。

##### （プログラムを通じて学んだこと・成果）

日本という国、日本語という言葉が、自分たちの思っている以上にクロアチアで知られていることが分かった。日本ではクロアチア語で挨拶ができる人はほぼいないと思われるが、クロアチアで日本紹介イベントをした際に、大人から子ども、さらにクロアチア国外から来た人も「こんにちは」「ありがとう」と挨拶をしてくれる人がいた。また、今回の研修先プーラ以外の観光地を訪れた際も、店員が日本語で声をかけてくれた。数々の場面から、クロアチアという国全体が日本のことを知ってくれているということを理解できた。

また、言語だけでなく、日本のアニメや文化に興味を持つ生徒が多く、むしろそこから日本語に興味を持ち、言語を学習しようとしている生徒が多かったように感じた。

日本語教育の面では、日本語教育者が予想以上にヨーロッパで必要とされており、また制度や設備、教育者の数もまだ整っていない部分もあって、もっと日本の日本語教育者がそ

の現状を知り、協力していくことが大切だと感じた。私たちのような日本語教育経験の浅い研修生でも十分できることはあるし、教育現場での需要は十分にあった。

日本語教育以外の面では、今までに経験したことがない、指導者という立場を経験したことで、学科会議に参加したり、生徒の成績をつけたりと、普段の大学生活では体験できないことができた。学科会議や教授同士の会話からは、今のプーラ大学の日本語教育の現状や問題点を耳にすることがあったり、研修生同士の会話でもうまく生徒のやる気を引き出す方法について考えたりすることができた。いつもは生徒側として大学の授業に参加しているが、先生という立場になることでこのような経験から指導される立場ではなく、指導する立場、そして組織に所属するだけではなく、組織を作っていく、よりよくする立場を、ほんの少しだけではあるが経験できたように思う。



クロアチア プーラ大学 沖西愛花（国際教養学科 3年）

（インターンシップの目的）

実際に生の日本語教育の現場に携わることで、教え方や、授業の進め方など、日本語教育に関する自分の理解を深めること。

さらに、学生など実際に日本語を学習している学習者がどうして日本に興味を持つようになったのか、そのきっかけを調査すること。

（プログラムを通じて学んだこと・成果）

今まで私が大学の講義で学んできた日本語教育とは、日本語の教え方自体についてや、学習者の誤用について等が多く、実際の授業のイメージが漠然としていて、日本語をただ教えるだけの作業を想像していました。しかし、3 か月間、プーラ大学で実際の日本語教育の現場に携わり、たくさんの授業や課外活動に参加させていただいた中で、いわゆる講義のような授業だけでなく、学生とイベントを行ったり、日本の映画を観たり、様々なアクティビティを行ったりというようなものも多くありました。ただ教科書を見てその内容を教えるだけでは、学生はどうしてもつまらなく感じてしまいます。どうしたらより楽しく勉強してもらうかということを考えるのも指導者として必要なことだと感じました。

日本語教育と一概に言っても、人との関わりがある以上、ただ単に日本語を教える作業としてしまうのではなく、より勉強したいと思えるような授業を構築することも必要であると言うことを学びました。



熊本県小国町 チーム背戸屋 岡田麻未（国際教養学科 2年）

（インターンシップの目的）

過疎化、少子高齢化が進む観光地の現状を把握し、地域おこしのやり方を学ぶ、見つけるためです。また現地に実際に赴くので、観光客の立場からの杖立温泉像もとらえたいと思います。

（プログラムを通じて学んだこと・成果）

インタビューでは旅館によって、人によって言うことや思うことが全く異なっていました。最初は全ての立場の人が納得できるものにしなければと思い、かなり苦労しました。

しかし、自分たちができる範囲で一生懸命に活動することが求められているため、意見の取捨選択も大切だということ学びました。その中で、多くの人取り組みたいと思えるような仕組みにどれだけできるが重要だということ学びました。2 目目に、特に現地の人にプレゼンするときには、具体的な数字や証拠となるデータも必要だということ学びました。やはり自分たちよりも現地の方たちは杖立を知っておられるため、生半可な情報ではなく、しっかりと細部まで明確にすることが大切だと感じました。最後に杖立温泉のような過疎化、少子高齢化が進む地域では人材不足が大きな問題となってきます。インタビューでも何回も出てきた言葉です。そのため地元の方に負担がかからない、そのことによって継続可能な地域おこしが実現するということが肌で感じる事ができました。同時にそのような理想的な地域おこしはとても難しいということも学びました。実際に地域おこし協力隊の方にお会いし、アイデアをお聞きできたこともとても勉強になりました。



熊本県小国町 チーム背戸屋 渋谷実穂（国際教養学科 2年）

（インターンシップの目的）

私のインターンシップの目的は主に2つあり、1 目目は過疎地域と呼ばれる地域の現状を知ること、2 目目は観光客への対応の方法など、サービス業において必要な知識、スキルを身につけることです。また、観光地で暮らす人々と観光客それぞれのニーズ、理想を知ること研究したいことの1つです。

（プログラムを通じて学んだこと・成果）

業務から最も学んだと感じていることは意見の多様さです。意見の多様さは予想していたにも関わらず、杖立温泉が抱えている問題の感じ方、解決方法がかなり様々で驚きました。このように、福岡にいと杖立温泉の方々を一つの集団と見てしまい、同じ考えを持っているように感じてしまいがちでしたが、いざその地で話を聞くと現在の立場などによってそれぞれ違う考えを持っていることを知りました。また、旅館での観光客に対する接し方や失礼のないインタビューをするにはどうすべきかなどを学ぶ機会にもなりました。さらに、人材が不足している杖立温泉で、現在どのようなことに困っているのか、補うために何が企画されているのかを知り、過疎地域の現状を具体的に学ぶことができました。



熊本県小国町 チーム背戸屋 須藤みのり（国際教養学科 2年）

（インターンシップの目的）

このインターンシップでの私の目的は、今興味を持っている分野である、地域創生を現場で学ぶことです。地域創生と言っても様々な形があり、自分には何ができるのか、また、将来仕事として関わる場合はどのような形があるのか知りたいと思い、参加しました。そこで、インターンシップ中の自分の中での目標としては、外部から地方に働きかける際に重要なことを学ぶということ置きました。

（プログラムを通じて学んだこと・成果）

様々な人にインタビューをする機会があったのですが、その中でどうすれば失礼にならずに自分が聞きたい話を引き出せるのか最初は苦戦しました。何度も繰り返していく内に、自分の中で、どのようなことを聞きたくて具体的にはどのような質問をするのかというこ



とを予め大方を決めておいた方が上手くいくということが分かりました。また、マイナスな面のことを聞きたいときは、最初からそのような話題を持ち出すのではなく、話の流れから聞いていった方が失礼のないように聞くことができたように思います。

また、地域を外部の人が変える、その地域で新しい取り組みを始めるときには、まずは地域の人と交流し、自分たちを受け入れてもらう必要があると感じました。実際にお話を聞いていった中で、外の力が加わることに懐疑的な意見も見られました。確かに、いきなりよそから誰かがやってきて自分たちの町を変えだしたとしたら、たまらないと思います。活動を自分たちだけで完結させるのではなく、地域の人々の信頼を得ることができて初めて、その地域を良い方向に導くことができるのだと思います。私たちは今回提案という形で、実際に地域の人を動かすということはなかったのですが、それを実現させるためにはもっと深い信頼関係というのが必要になってくるだろうと感じました。

さらに、私たちの活動の中でも、地域の人達の協力無くしてはできなかったことが多くありました。実際に、あまり協力してくれる人のいなかった前半よりも、後半のほうが充実した調査や実験を行うことができたように思います。そのような意味でも、地域の人と関係を築くということがとても重要だということが言えます。

また、夏祭りの手伝いを通して、地域の行事は、本当に多くの人々の力が合わさってできている物なのだというのを学びました。今までお祭りに運営側で参加したことはなかったため、とても良い経験になったと思います。しかし、何をするにしても人手が必要になってくるため、若い人の少ない杖立温泉や小国町でこれからもそのようなイベントを行っていくためには、やり方を考えていく必要があると感じました。

旅館での一日仲居体験では、実際に働いている仲居さんに仕事を教えてもらいながら手伝いました。仲居さんは箸の置き方一つをとってもこだわりがあり、感動しました。旅館で一番お客さんと近くで接する仲居という仕事は、旅館の印象を左右するとても重要な仕事だと思いました。また、旅館側としてもその従業員の教育は大切になってくると感じました。



長崎県対馬市 佐藤歩（国際教養学科 3年）

（インターンシップの目的）

これまで知らなかった対馬で、これまで関わりのなかった環境分野に携わることで自分の視野を広げるため。

（プログラムを通じて学んだこと・成果）

ヒアリングでは、予備知識の重要性や話を聞きながら次の質問を考える難しさを学んだ。農家さんから様々なお話を伺うことで、今まで知ることができなかった農業の大変さや楽しさも知ることが出来た。実践塾では学生スタッフ兼熟成として参加し、グループワークでは初めてファシリテーターに挑戦したが、塾生でもあるため自分の意見も出さなくてはならず、自分の意見を出しながら班員の意見を軌道修正したり意見を引き出したりする難しさを学んだ。



1ヵ月間で100人以上の対馬の方々にお会いしお話しできたことで、対馬の良さや対馬の方々の様々な思いを知ることが出来た。受け入れ先のMITのスタッフさんやたくさん

関わった市役所の方々 は 皆さん本当に素敵な方ばかりで、困ったことはないか いつも気にかけてくださり、対馬の方々の暖かさも存分に感じる事が出来た。インタビューでも農家さんは親身になってお話をしてくださり、対馬の農業の現状を知ると同時に対馬自体の魅力も知ることのできるインターンだった。成果発表では別のインターンをしている子たちの話も聞くことができ、全く違った内容のインターンだったため新しい意見を聞いたので自分の視野が広がったように感じる。

福岡県庁文化振興課 井上公子（環境科学科3年）

（インターンシップの目的）

若者が福岡のどのような文化資源(食・スポット・自然など)に興味を持っているのかの現状を調査し、その資源を活かしたイベントを企画すること。また、今ある文化資源と別のものを組み合わせ、新たなモノを作るような企画の立案を行うこと。

（プログラムを通じて学んだこと・成果）

私は福岡県庁文化振興課のインターンシップに参加し、県庁で働く公務員の方々の仕事を体験することが出来ました。実際に行政のデータベースを使用して起案書を作成したり、データ入力をしたりと、実践的な業務から、イベントの運営スタッフや文化体験プログラム



の動画作成まで幅広いお仕事に携わらせて頂きました。公務員の業務は決して華やかなものではなく、地道な作業が多いです。イベントの際には地域の方や関係者の方と連携しながら、裏方としてサポートに努めていました。イベント成功に向けて様々な計画や準備を行っているため、トラブルやハプニングが生じてもすぐに対応していたことから、柔軟な対応力や計画性が重要だと学びました。そうした仕事の姿を見ていたので、私自身イベントで司会をしたときに、その場の状況にあわせて司会進行をするように心がけました。もともと人前に出るのが苦手ですが、ギャラリートークの司会を経験させてもらい、無事に進行が出来たことで、自分の自信に繋がりました。

たことから、柔軟な対応力や計画性が重要だと学びました。そうした仕事の姿を見ていたので、私自身イベントで司会をしたときに、その場の状況にあわせて司会進行をするように心がけました。もともと人前に出るのが苦手ですが、ギャラリートークの司会を経験させてもらい、無事に進行が出来たことで、自分の自信に繋がりました。

福岡県庁スポーツ振興課 [ラグビーワールドカップ2019福岡開催推進委員会]

花田唯（環境科学科3年）

（インターンシップの目的）

- ・公務員の業務内容を知ること。
- ・イベントの企画・実施を通して自主性・主体性を身につけること。
- ・女性や若者のラグビーファンを獲得するために、アイデアを出し、実施までいたること。

（プログラムを通じて学んだこと・成果）

職員の方々は、ラグビーワールドカップ2019を盛り上げるために、様々な打ち合わせ、企画を行っており、ラグビーを通して、県民を巻き込んで福岡を活性化させることは県民市民のために働くという事の1つなのだと感じた。

また、仕事をやる上で、任された仕事の進捗状況を逐一報告し、100%完了していなくても良いから、30%出来たら上司に見せて確認してもらうことが大切だと学んだ。つまり、連絡を密にとり、情報共有が出来ていることが、仕事を進める上で基本的なことだが重要であると学んだ。

福岡県庁の仕事に興味があったが、課によってする仕事は様々で、ラグビー事務局のようにイベントが多く、行動範囲も事務局にとどまらないものから、1日事務作業のような課もあることを知ることができた。さらに、インターンシップでは、ラグビーに限らず、様々な課の職員の方と関わることが出来、その仕事内容なども聞くことが出来た。



### (3) 2019年度

最終年となる2019年度は、20名を送り出した。前年度と異なり、クォーターを休んで参加する学生はほとんどおらず、どちらかというとも長期休暇を活用してプログラムに取り組む学生が多かった。

新たに学生が行った場所もあり、この3年間を通じて、様々な場所で学生たちが素晴らしい体験をさせていただける結果となった。

派遣先	派遣期間	氏名	所属(当時)	
カナダ ウィニペグ大学 CWEプログラム	7月2日~8月26日 8月2日~9月23日  20年2月8日~3月23日	前田知玲 柳下茉璃 落水友紀 神崎あゆみ 道本結衣 図師田愛佳	国際教養学科3年 国際教養学科3年 環境科学科2年 環境科学科2年 環境科学科2年 国際教養学科2年	
インド Sangam World Centre	8月24日~9月25日  9月26日~10月26日	濱田彩花 矢野さくら デン・テ ィ・チャ ム・アイン	国際教養学科1年 国際教養学科1年 国際教養学科4年	
フィンランド 0.7 design	20年2月7日~3月30日	青木春香	国際教養学科2年	
オーストリア H.I.S. Austria	20年2月8日~3月30日	西山優花	国際教養学科2年	
福岡市 西日本新聞イ ベ ントサービス  (株)コンテンツ	6月7日~8月2日  8月7日~9月13日	藤島朱理  余信栄 田中生絹	環境科学科3年  国際教養学科3年 国際教養学科2年	
	福岡 DC	8月19日~9月20日	渋谷実穂	国際教養学科3年
宗像市 宗像市役所	8月2日~9月25日	李采垠	国際教養学科3年	
大分県別府市 BEP PU PROJECT	8月5日~9月29日	安部悠莉華	国際教養学科3年	
糸島市 スチームシップ	20年2月17~21日、3 月9~31日	北茉優花	食健康学科3年	
熊本県小国町 チーム背戸屋	2月18日~3月31日	中野桃花 林千嘉	国際教養学科2年 国際教養学科2年	

カナダ ウィニペグ大学 CWE プログラム 前田 知玲 (国際教養学科3年)
(インターンシップの目的) プログラムに参加するにあたり、英語のスキル、特にコミュニケーション能力の向上を目標とした。理由としてはやはり日本にいとかなか英語を勉強してインプットすることはできるがアウトプットする機会が少なかったことにある。 また、事前学習においてカナダの移民について調べていたので、移民の人たちに対する就業支援や生活支援について調べようと思った。移民を国の強みとしているカナダで、多様性を認める社会の現状について調べることは今後の日本においても重要な点だと考えた。
(プログラムを通じて学んだこと・成果) ウィニペグ大学での学習では、知っているはずの文法事項なのになぜ今でも間違えるのか

をもう一度原点に戻って学習できたり、リスニングにおいてはただテストでいい点数を取るための方法だけでなく、日常生活でも役に立つコツや日本に帰ったあとでも学習する方法など幅広く学習できたりした。

ワークショップにおいては、ボランティア就業体験だけでなく、将来海外で働く際に役に立つ情報やカナダの職場の特徴を日本や他の国との文化と比較しながら学ぶことができた。

ボランティア就業体験先では年齢の異なる子供たちと会話する中で、いかに分かりやすく自分の意見を言うか、良いことと悪いことの区別をはっきりさせるべきだということを学んだ。

様々な民族的背景を持った人たちが住んでいるので、互いの文化を尊重したり、理解を深めたりすることが大切だと学んだ。それぞれの文化で独自のコミュニティをもっているが、皆が「カナダ人」であることを大切にしているように感じた。

大学内での授業では日本人が一人ということもあり、最初はとても不安で自分自身の意見を求められたときに躊躇してしまったり、他のクラスメイトと話すことも難しかったりしたが、授業を受けていく中で間違いを犯してもそれを改善していくことで自分自身の成長につながることを学び、授業でも昼休みなどの他の時間でも積極的にコミュニケーションをとることができるようになった。

ワークショップで学んだ Small Talk というものを生かして、バスの中や街中で出会った人とも会話を楽しめるようになったり、ホームステイ先の家族とも食事中や休日に会話することができたりした。

また、こういった様々な人との会話を通して、カナダに住むことの利点や就業支援などについて理解を深めることができた。



#### カナダ ウィニペグ大学 CWE プログラム 落水友紀（環境科学科 2年）

##### （インターンシップの目的）

現地の人々と英語を使いながらインターンを行うことで「英語を使いながら働く」ことを体験し、将来の就職先について考えるきっかけにしたいと思っていました。また、多文化社会であるカナダでの生活を通して価値観を広げたいとも感じていました。そして最大の目的は英語のコミュニケーション能力を上達させること、新しいことに取り組むことが苦手な私が新しい環境で積極的に活動することで苦手意識を減らすことでした。

##### （プログラムを通じて学んだこと・成果）

この業務を通して「コミュニティを提供していくことの重要性」を感じました。就業先は移民センターなので移民の方が英語や子供の教育方法などを学びに来ます。しかしただ学びのために参加するのではなく、心身のストレスを解消するために参加される方もいます。就業先のスタッフも移民の方が多く、センターに来た方は同じ第一言語を話せるスタッフやほかの生徒さんと交流することで精神的に支えられることもあるようです。日本は多くが日本人なのであまりこの重要性は感じてきませんでした。母国語が日本語でない方も相当数います。そういった方が安心して交流できるような場が必要だと実感しました。

また、日本とウィニペグでの環境対策と意識の違いについても学びました。まず建物のいたるところで「リサイクル、コンポスト（堆肥）、ごみ」の3つに分かれたボックスが置

いてあります。日本では特にコンポストとゴミは区別しないまま捨てているので違いを感じます。また、環境への意識の高さを感じました。就業先にも外部講師のかたが来て3Rについて学習する機会がありました。その方は学校にも訪問して分別方法を教えたり再使用を実践したりするなど積極的に活動をされています。そして就業先のスタッフの方も皆さん真剣に話し合っていました。これらは日本と比べて優れていると思います。一方でリサイクルされるものはすべてまとめて一括でリサイクルされてしまいます。分別がされないことは不十分だと思いました。こういったことから日本で一人一人が行う環境対策の課題が見えてきたと思いました。

さらに、自分の興味関心として「日本とカナダの労働環境の違い」がありましたが、これらも学ぶことが出来ました。一番異なっていたのは就業時間です。大体の方は早くて朝8時から夕方4時頃まで働いていました。私が4時過ぎまで業務を行っていると言われ「早く帰りなさい」と言われたこともありました。基本的に残業はしないようです。また休憩をとりながら楽しんで業務をこなしているのも日本とは違うかと思います。毎週水曜日にはポットラックといって皆さんで料理を持ち寄って楽しみます。日本と同じように仕事をこなしていると「休憩も挟んだほうがいい」と言われもしました。全体的に働きすぎず楽しみながら働いている印象があり、働きやすい環境だと実感しました。

私にとっての最大の成果は、事前学修からカナダでのプログラムを終えたことです。新しい慣れない環境にいるのが苦手な私で、海外に行ったことがない私が海外で英語を使ってインターンをするというのはとても高いハードルに感じられました。それを乗り越えて挑まなければならない場面が何度もありました。具体的に言うと英語を使って積極的に発言を行う、知り合いが殆ど居ない状態で海外で長期滞在する、といったことです。それらを一つ一つこなして「やりきった」と思えるインターンが出来たことが最大の成果です。

また、インターンシップをしたことが無かったので実際に働く感覚を知ることが出来ましたし、海外で働く事にも興味があったので就職について考えるいい機会になりました。

そして7週間英語を使っていたので英語も上達した気がします。日常生活で英語を使う人達がどのような表現を使うのか、といったことを知ることが出来ました。



カナダ ウィニペグ大学 CWE プログラム 神崎あゆみ (環境科学科 2年)

(インターンシップの目的)

私は、「実践的な英語を学びたい」、「就業体験で地域振興について学びたい」という主に2つです。日本ではどうしても恥ずかしさなどからなかなか実践的な英語を鍛えにくいと感じていたため自分の英語力を試すとともに、今後の英語学習の参考になればと思いました。また、カナダは移民受け入れに積極的なので、私の興味のある地域振興についてカナダで学びたいと思いました。

(プログラムを通じて学んだこと・成果)

英語については前半の語学研修とホームステイ、職場、街中全てにおいて濃く学びました。実際に挨拶がどう行われるのか、文法がどのように使われているのか、相槌はどのような方が良いのかなど、座学ではなかなか学べない感覚的なことも学びました。また、就業先ではカナダの人々の環境への意識の高さを知ることができました。私自身、環境科学科に所属しているため、3Rなどたくさん授業でも触れてきましたが、日本で環境配慮行動へ

の積極性はあまり感じられません。しかし、ウィニペグ大学では、学校内のカフェで使われるコップやお皿、フォークやスプーンまでもほぼ全てコンポストができるように開発したそうで、街のカフェやスーパーなどでも紙ストローや金属ストローがたくさん取り入れられていました。日本においてこれから学習する際にも大変参考になると感じました。日本の外から日本を見たことで生活習慣や、職場の意識の違いについて気づくことができました。また、自分から話しかけなければいけない場面や自分から進んで行動しなければならない場面があったので、コミュニケーション力や判断力も鍛えられたと感じています。特に、それらを英語で行わなければならないので、英語のリスニング力コミュニケーション力は確実に上がったと感じます。自分で設定していた課題は「自分が異文化から入ってきた者として、暮らすうえでよいと思ったこと、不便と思ったことを見つける」というものでしたが、異文化の人がいることが当たり前すぎて暮らしやすいことだらけで驚きました。異文化の人が暮らしやすいだけでなく、子連れのお母さんや、車いすの方、お年寄りの方など社会的弱者になってしまう人々にもやさしく、人だけでなく、バスの構造からバリアフリー化が進んでおり、社会全体が協力的なことに感動しました。日本では黒人の方や白人の方、ターバンを巻いた方、などを見かけるとまだまだ周りよりも目立ってしまい、つい視線が集中してしまうと思うのですが、ウィニペグではだれがどこの国の人なのかかわからないくらいに多種多様で、視線もそんなに感じることはありませんでした。しいて言うならば、日本食のお店がたくさんあったにも関わらず、私が本当に日本食と認められるお店には出会わなかったのが、文化の勘違いが起きているように感じました。また、失業した人たちもたくさん街におり、治安は決していいとは言えませんでした。したがって、移民を受け入れることのメリット、デメリットを少し理解できました。そして、改めて、日本の移民受け入れは少なく、意識もまだまだ薄いことを実感しました。



カナダ ウィニペグ大学 CWE プログラム 道本結衣（環境科学科 2年）

（インターンシップの目的）

カナダと日本の生活の違いについて学ぶこと。気候や、文化など日本と異なることがたくさんあり、その生活の仕方は違うと考えました。また、自分ができる限り最大に英語力を身に着けること。この二か月でどれほど上達するかは自分次第であり、行ったことを後悔しないようにする。積極性を身に着けること。

（プログラムを通じて学んだこと・成果）

私が学校生活から学んだことは積極性です。同じ時期に同じプログラムに参加したのは四人でしたが、私だけクラスが離れてしまい、最初はとても不安がありましたが、今ではよかったなと思っています。他大学の友達をたくさん作ることができました。そのクラスメイトから積極性を学びました。私の周りには発表することが好きという人があまりいませんでした。私も苦手意識を持っています。しかし、私のクラスにはそのような人が一人もいませんでした。皆発表することが好きと言っていました。私には大変驚きでした。なぜ私は嫌いなのだろうか、思い直しました。今でも緊張することには変わりないし、好きだとは言えないけれど嫌だという気持ちはなくなりました。また、発表するとき挙手制だったので積極性がないとクラスに参加することもできないという状況になりました。このように積極性を身につけざるを得ない状況があったおかげで成長することができました。

また授業を通じて英語力も成長しました。最初のころに比べると今はかなり英語が聞き取れるようになったと思います。それだけではなく買い物するために必要な英語など生活の中で自然に身についたものもあります。後半のボランティア活動から学んだことは自信を持つこと、人に声をかける勇気です。ボランティア活動の中にあつたフロントワークでは、電話に出たり、お客の対応をしたりとても勇気のいることでした。特に電話は難しくとても早口なので聞き取りにくく、取るには勇気が必要でした。また電話をとって用件を聞いた後私にはその要件を解決することができないことが多いので人に助けを呼ばなければなりません。最初はその助けに声をかけるのに勇気がいりました。なんて声を掛けたらいいのかかわからず、対応に時間がかかっていました。しかし最後の方には誰に助けを求めばいいのか的確に判断することができるようになり、素早く助けを求めることができました。カナダで生活する中でバスの乗り降りの時は運転手にあいさつするなどという生活になじむことができたことも成果だと思っています。

私の目標はカナダと日本の生活の違いを学ぶという事でした。二か月間ホストマザーと生活する中で、また学校や職場町の中でも様々な違いを見つけることができました。まず、一番の違いは環境への配慮の仕方です。ウィニペグにはゴミ箱がたくさん分かれていました。ペットボトルと、缶、コンポスト、リサイクル、その他です。日本にもペットボトルと缶には分かれているがコンポストまではないと思います。コンポストとは生ごみを埋めて、たい肥にすることです。私がホームステイしたおうちには庭にコンポストする場所があり、生ごみを捨てていました。どこにでもあるわけではないですが、大学と職場にはありました。また、町中いたるところにごみを捨てる場所とリサイクルボックスがあります。しかし、街中は断然日本のほうがきれいです。ごみがたくさん落ちています。ホームレスの有無や、人の考え方、習慣などの違いによるものだと思いますがその町中にあるゴミ箱は効果があるのかなと不思議に思いました。このような疑問を見つけるのも一つの成果だと思っています。日本に帰って私は環境科学科なので研究することができるからです。ほかにも学校生活を通して積極性を身に着けることができ、またボランティアワークを通して社交性と責任を学びました。



インド Sangam World Centre 濱田彩花（国際教養学科1年）

（インターンシップの目的）

スラム街における地域社会活動を通して、貧困問題の解決策のヒントを得るため、スラム街の実態について自分の目で見て知るために参加しました。また、社会貢献活動に参加することで、将来に生かせるようリーダーシップをはじめとする様々なスキルを身につけたと思いました。

（プログラムを通じて学んだこと・成果）

一つ目は、言葉が通じなくても、相手の立場になって考えることでコミュニケーションをとることはできるということを改めて学びました。サイトでの活動が始まった頃はアクティビティのルールが上手く伝わらず、それに困っていましたがジェスチャーを使ったり、相手の表情から読み取るように意識したりするとだんだんコミュニケーションがとれるようになり、言葉の壁は思っていたほど大きくはないのだと学びました。そして相手の気持ちを理解しようとする姿勢が大事なのだと改めて強く感じました。



二つ目は、先入観や固定観念で物事を決めつけてはいけないということです。Maher ではおばあちゃんたちと活動していて、私は体を動かすアクティビティは無理だろうと思っていましたが、やってみると意外にもできたのです。動けないものだろうと決めつけてアクティビティを考えていたため、あらゆる可能性を自分自身で狭めてしまっていたことに気がつきました。これは貧困問題の解決や地域振興に向けた取り組みを考える際にも言えることだと思います。つい自分の周りの環境や日本と比べて、モノを見てしまいがちですが、それでは「その国(地域)に合った本当に必要としている支援はできない」と学ぶことができました。視野を広くして、行動の幅を広げられるようにしたいです。



サイトで活動する中で、どのようにアクティビティを進めていけばいいのか途方に暮れる時もありましたが、日々反省点や改善点を Tare で話し合い、行動することができました。時には施設のおばあちゃんたちから「もっとボールを使ったアクティビティがしたい」などとリクエストをもらうことがあったり、自分たちの考えた遊び方が伝わらなくて困ったりしましたが、上手におばあちゃんたちの意見も取り入れながら日を重ねるごとに臨機応変に対応できるようになりました。また、問題の解決や現状を改善・発展させるために「自分にできることは何なのか」を常に考えながら、積極的に行動できたと思います。そして Tare で協力することで最終日まで、しっかり活動を成し遂げることができました。

インド Sangam World Centre 矢野さくら（国際教養学科1年）

（インターンシップの目的）

高校生の頃から将来の目標や夢が漠然としていることに悩んでいたため、インターンシップに行くことで視野を広げて選択肢を見つけ、少しでも将来のビジョンが明確になればと考えた。英語は得意ではないが、自分をより厳しい環境におく経験をしたくて、海外でのインターンシップを選択した。

（プログラムを通じて学んだこと・成果）

言葉が通じなくても意思の疎通はできるということ。Maher では想像以上に英語が通じず、アクティビティをちゃんとできるか不安だったが、目線を合わせて理解しようとしながら接することによってコミュニケーションをとることができた。また、自分もリーダーとして動くことができるということ。リーダーとは集団の中のある一人が先頭に立ち指示を出すものではなく、誰かや何かのために自分で何かを考え出し、自分から実行する力を持っており、集団の中に何人いてもかまわないものである。



日本という遠いところから来た、肌の色も言葉も現地の人とは違う自分でも、Maher の人は歓迎してくれた。リーダーが地域社会で人と人との繋がりを作り、その地域のためになることを考えながら行動していれば、そのリーダーは地域の人にとってとても心強い存在になる。自分が直接かかわるのはもちろん、地域に住む人同士の繋がりを作るきっかけを提供することも重要である。

アクティビティを行う中でリーダーシップのマインドセットを実行し、自分のリーダーシップスキルを高めることができた。自分の将来のビジョンを少しでも明確にしようと思っ

ていたが、実際に Maher で人々とかかわりながら活動することで、自分の目と手足が届く範囲の人の力に確実になれるような仕事をしたいという目標ができた。

男女の不平等について、私は特に女性の持つ潜在的なジェンダー意識に興味があり、実際に目の当たりにすることを期待していた。すると特に高齢の女性の多くが家族構成や男兄弟の有無、父親の名前を尋ねてきたことから、年代による意識の差を実感することができた。

インド Sangam World Centre ザン・ティ・チャム・アイン（国際教養学科4年）

（インターンシップの目的）

インドでは社会問題がまだまだたくさん存在しており、それを解決するために、インドでの NGO はどのような役割があるのでしょうか？また、NGO の活動は、社会改善にどのように貢献しているのかをこのプログラムを通して考えてみたい。私は特に児童労働の問題に興味を持っているため、児童労働の防止に取り組んでいる NGO を中心に研究したい。

自分のリーダーシップを向上させたい。

（プログラムを通じて学んだこと・成果）

Tara Mobile Creches での子供は貧しい町からプネーに移動し、建設現場で働いている移民労働者の子供達であった。移民労働者はほとんど教育を十分に受けない、そして仕事のためにいつも移動し安定な生活を持っていないため、彼らの子供達が学校に行かず、道で遊んでいたたり、働かせたりしていた。そうした状況を見て、Meera Mahadevan が TMC を開設し、その子供を支援し始めたという。Tara Mobile Creches は、子供達が学校に行けるように支援し、無料で朝ご飯や昼ご飯の食事を提供し、子供全員が友達と一緒に遊んだり勉強したりできる安全なところを確保している。結果として児童労働のような社会問題の解決に繋がっているだろうと考える。また、期間中に訪問した Doorstep school



という NGO は、学校がない遠隔の地にあるスラムに住んでいる子供に教育を受けるチャンスを与えるため、教育設備を整えるバスでそうした地域に移動し、バスで子供を教えるというプロジェクトを実施している。Tara Mobile Creches と Doorstep school は、それぞれ違うやり方があるが、社会で不利な立場に置かれている子供が自分の権利をちゃんと受けられるように取り組んでいることがわかった。また、貧困脱出のツールである教育のチャンスを与えることにより、現地の NGO は、子供に自分の将来の生活を支える潜在能力を開花できるチャンスを与えているのではないかと感じる。

サイトにおいて Girl scout のリーダーであるマダガスカル人の Tare と一緒に働いたことで、彼女から様々なことを学ぶことができた。彼女は様々な面白いアイディアがあり、いつも自信を持って子供達を熱心にアクティビティーに参加させていた。私たち二人とも英語が母国ではないので、言語の壁によりお互いの意見をよく理解できない時や、意見を戦わせる時が少なくなかった。そうした時に、私たちは、相手を尊重しながら自分の意見をできる限りはっきり述べ（言葉で説明できないことは、ジェスチャーや絵を描くことで表す）相手の意見もちゃんと聞く、一緒に一番いい提案を見つけて頑張っていた。一緒に働けば働くほど、お互いをよく理解でき、どんどん仕事をスムーズに進むことができた。そのために、このプログラムを通して、将来国際環境で働いたらこんな問題があるのかをわかって、それを解決するために練習できるチャンスを得たと思う。また、リーダーの立場で仕事をしたことで、リーダーは命令で他の人に従事させるのではなく、チームの最後

のゴールを達成できるようにメンバーを仕事に参加させたり、熱心に協力させたりするという巻き込む力の大きさをよく感じられる。

さらに、4週間サンガムで生活をし、様々な国から来た人たちと交流したことで、様々な文化を学べるだけではなく、英語でのコミュニケーションをすること、新しい外国人の友達を作ることにもっと自信を持つようになると感じる。この体験を通して、自分をチャレンジでき、自分の comfort zone を越えることができたと思う。

カナダ ウィニペグ大学 CWE プログラム 関師田愛佳（国際教養学科2年）

（インターンシップの目的）

移民文化が根付くカナダにおいて、職場、学校など様々な場面で多民族国家のあり方を体験する。

（プログラムを通じて学んだこと・成果）

学校においても職場においても自分の立場がマイノリティであることが多く、そんな環境の中で「だからこそできること」「自分だからやるべきこと」というのを考える時間が多かったです。またそれを明らかにするためには、周りの人がしている業務の内容をしっかりと把握する必要もあるし、特に子ども相手をする時などには自分の判断だけではなくより詳しい人の意見を聞くというのが重要だと学びました。また、職場は子供だけでなく親のサポートも行っていてなにかを支援しようとするとき様々な形のサポートがあって、多方面での支援が必要だと学びました。

不規則なスケジュールで且つ就業期間が短かったため達成できたことはあまり多くはなかったと感じています。それでも、「生徒の名前を覚えよう」「生徒の出身国の知識をつけよう」など毎日小さな目標を自分のなかで設定しこなしていくことで少しずつではありますが前進できた実感は得られました。何より目標を設定し達成するというルーティンをつくることが大きな成果だったと感じています。

フィンランド 0.7 design Ltd 青木春香（環境科学科2年）

（インターンシップの目的）

北欧デザインを通して環境に配慮した商品を日本に輸入するにはどのようにしたらいいのか、アピール・宣伝の仕方について学ぶこと  
フィンランドのリサイクルシステム及び人々の考え方、活動について知ること

（プログラムを通じて学んだこと・成果）

なんでも自分の気持ちに正直に行動できたことが良かったと思います。最初の方はどう思われるかを気にする性格により自分の気持ちを伝えるべきか迷うこともありましたが、しかし周りの方々がとても優しく、自分の意見を言った後に受け入れて下さったり訂正してくださったりしたので、全体を通しては自分の思っていることを素直に伝えることができたと思います。後半はほぼ人にどう思われるかと気にすることはありませんでした。これは自分にとってかなり大きな変化でした。また、「フィンランドでしかできないかもしれないからやってみよう」という気持ちにより、日本では絶対に挑戦しないようなことにも前向きに挑戦することができました。このやってみよう精神のおかげでそれが大好きになったり、ことがうまくいったりすることが多く、大切な考え方・姿勢を学びました。そして人とのつながりの大切さを日々



感じました。一期一会という言葉の通り、本当に出会いを大切にしなければならぬと思う毎日でした。いきなり日本から来た私にとっても親切にしてくださり、人々のあたたかさを感じることができましたし、自分も見習うべきだと思いました。反省点としては英語力の低さです。このインターンシップでこの英語力でも想像の何千倍も充実した毎日過ごすことはできましたが、もっとたくさん話せたら、うまく伝えられたらと思う場面は多かったです。そして何より英語ができたら私に優しくしてくださったたくさんの方々にもっとたくさん感謝の気持ちが伝えられたのではないかと思います。しかし英語に対しての抵抗はなくなり、勉強する意欲がとても湧く良いきっかけにもなりました。

福岡市 西日本新聞イベントサービス 藤島 朱理（環境科学科3年）

（インターンシップの目的）

- ・知らないこと、わからないことがあったときに人に聞く前に取るべき行動をする。（ある程度理解していないと説明してもらったとしても、上手く頭に入らない）
- ・社会人としての基本的作法（言葉遣い・仕事の仕方・分からないことがあったときの尋ね方）などを知る。

（プログラムを通じて学んだこと・成果）

- ・顔が見えない相手と話すとき、相手が知りたいことは何かをはっきりと掴むこと。また、説明する際も短い言葉で分かりやすく伝えることが大事であること。
- ・大会の参加者との間で何か変更などが生じた場合、必ず書面でいただく。（何かあったときの証拠となる。）
- ・交渉する際に、自分の譲れない部分をしっかりと持つこと。また、相手が拒否した部分を提案内容を少し変更して再提案すること。
- ・提案するときの言葉の選びかた。
- ・パネルを作る際の美しいデザインの作り方。
- ・その日に起こった大変だったことなどは、報告する。情報共有が大切。知っておくことに無駄は無いので、小さなことでも伝える。
- ・大会運営にあたり、沢山の企業がかかわっていると分かったこと。それにより、何か変革を起こしたいときは関連企業を説得することから始まるので、変革することは簡単ではないと分かったこと。
- ・今までのタイアップ企画について教えていただいたこと。（タイアップ企画では二つの企画の絡め方を五感の他方の面から考えることが大事）
- ・自分の力で交渉することができたこと。何かして欲しいときは、相手方へのメリットを十分に伝えることが大切。
- ・社会的な対応の仕方を少し理解できるようになった。妥協すべきところと、してはいけないところがあると分かった。
- ・人生で初めて新聞の取材を受け、新聞社の取材の仕組みも見ることができた。



福岡市 株式会社コンテンツ 余信栄（国際教養学科3年）

（インターンシップの目的）

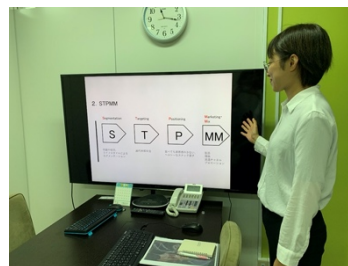
私は現在国際経済マネジメントコースで勉強しており、その中でも特にマーケティングに興味を持っています。そのため、今回のインターンシップ先ではマーケティングについて

学ぶことが出来るという事で応募しました。つまり、このインターシップでは実際の現場ではどのようにマーケティングが行われているのかを研究し、さらに WEB サイトを実際に自分で作ってみることが目的でした。

(プログラムを通じて学んだこと・成果)

ヒアリングのアポ取りをするときは、まず相手の NG な時間帯を聞かないといけないことが分かりました。また実際にヒアリングのときは、アイスブレイクの大事さや、どのようにすれば相手から話を引っ張り出すことが出来るかということも分かりました。そして、実際の現場でのマーケティングは大学から学んだ通りで行われていることが分かりました。最後にプレゼンテーションを作ることは、資料やパワーポイントの見せ方が重要であることが分かり、そのことを踏まえて、発表の話のつながりの大事さについても気づくことが出来ました。

日本の企業でインターンシップが出来たことが私にあっては大きな成果でした。なぜなら留学生はなかなか日本の企業の現場の雰囲気や業務について学ぶことはできないため、留学生である私はインターンシップを最後まで終えたことが大きな結果物だったからです。そして、最初の目標であった自分のサイトを作ることはできませんでしたが、福岡女子大学に提案できるサイトの企画ができました。企画のためには様々な情報を収集しまとめていけなかったのですが、その情報収集の段階で、エクセルやワードについてもっと詳しくなり、これからの就職活動にも活かして行きたいと考えました。



福岡市 株式会社コンテンツ 田中生絹 (国際教養学科 2年)

(インターンシップの目的)

WEB サイトが作られるまでのフローを細部まで理解するとともに、WEB 制作におけるブランディングの実例を持ち帰る。

(プログラムを通じて学んだこと・成果)

はじめは丁寧さ、完璧さを求めるゆえに時間をかけて作業をしていました。しかし、作業の効率を考え、時間を意識して区切ることの大切さを指摘されてからは、時間を意識して作業するようになり、効率よく多くの業務を成し遂げることが出来ました。また、企画を立案する際には自分たちで情報収集をしたいと思い立ち、それを伝え、大学に赴いたり、アンケートを取ったりと自主的に動くことも出来ました。そして、行き詰った際にひとりで考えこまず、社員の方にアドバイスを仰いだことで、企画の流れを考えるうえで自分では気づけないことに気づくこともできました。これからは、よりよい何かを得るために、自分で考えて行き詰まったりしたときだけでなく、自分で自信を持っていることに対しても一度客観的な視点から考え直してみたり、アドバイスを仰ぎたいと思います。



福岡市 福岡地域戦略推進協議会 渋谷美穂 (国際教養学科 3年)

(インターンシップの目的)

私がこのプログラムを通して、自分が生活している福岡はどのような課題があるか、私はどのように関わられるのかを知りたいと考えていました。そこで参加前にたてた目標は、「福岡が抱えている課題 (特に高齢者や SDGs に関連したもの) を正しく理解し、そのた

めに何が行われているのかを調査し、自分なりの解決策を考える」でした。

(プログラムを通じて学んだこと・成果)

インターンを通して、改めて、福岡の課題の多様さを学びました。人口が増えているため活気がある都市に見えても高齢化が進んでいたり、世界の都市に比べて MICE 誘致の十分な機関が揃っていなかったりなど、多様な課題があると知りました。また、実際に話し合いの場に参加することで、公的機関と民間のバランスの問題など、普段感じることはない制限があることもあり、一概にこうすれば解決するのではと考えるのは難しいと実感しました。私は、企画・マーケティングに興味がありますが、現状と関係者それぞれの立場を正しく理解する必要があると感じました。



インターン先で行った課題は主に二つあり、一つ目は「二日市温泉の活性化計画」です。8月に他のインターン生とともに食・癒し・シャトルバス・宣伝をテーマにした案をアンケートをもとに作成し、9月に私一人で朝風呂・シャトルバス・宣伝をテーマにした第二案を作成しました。9月からはそれと並行して「大学生の県外流出」という課題を行い、問題定義のためアンケートを取りましたが傾向がはっきりと出てこなかったため、対策案を出すのではなく、なぜ傾向が見えなかったかを振り返るという方針に変更し、質問の工夫の仕方や正しい読み取り方などへの理解を深めました。最終日は温泉の案の概要を含め、インターン期間中に行ったことや感想をパワーポイントを用いて発表しました。

宗像市 宗像市役所 李 采垠 (国際教養学科3年)

(インターンシップの目的)

宗像市が取り組んでいるまちづくり関連仕事について学ぶ。また、様々な活動に参加して現場を体験することで、地域の課題を把握、対策について考察していく。

(プログラムを通じて学んだこと・成果)

今回私はインターンシップを始める際に、「宗像市に新たな観光ルートを提案する」ということを自分の研究課題として決めて調査を行ってきた。したがって、観光資源を訪れることが多かったが、インターンシップ期間中にはそのような観光面でのまちづくりの取り組み以外にも、福祉、教育、環境など様々な分野で活躍している人と会う機会が多くあった。多くの人々は、



取り組んでいる分野は異なるが、宗像のために何か頑張っている様子を見て、宗像のまちづくりのポイントは人的資源にあるということに気づいた。最初のきっかけはそれぞれこととなるが、結局行ってきた活動が結果的に宗像に役に立っていた。また、そのような活動を続けられているのは、まちづくりに力を注いでいる行政のしくみと熱心に取り組んでいる人がいるから、このような好循環が継続されていると思った。

つまり、私はインターンシップを通して、まちづくりは人がいるからこそ実現可能なものだということ学んだ。

インターンシップを通して得られた成果は、まちづくりという仕事が自分の中で定義づけられたのである。私は、宗像市でインターンシップをする前に、まちづくりについて本を読んだり、授業を受けたりしながら自分なりに勉強を間接的に行ってきた。その時には、まだまちづくりが具体的にどのようなことなのかははっきりしてなく、自分の中では、「格好いい」分野だったとも言える。ここで、私が格好いいと思った理由は、衰退していたま

ちが生き生きになり、活性化になること仕事だと思ったからだ。しかし、実際にインターンシップを通して、直接経験し、色んな人と関わりながら、まちづくりというのは、思った以上に忍耐力が必要とな仕事であるということに気づいた。本やテレビでいわれそうな事例も、実は色んな試行錯誤を耐えて行われたことであるということが分かるようになった。それでもまちづくりの仕事が楽しいと思ったのは、ドラマティックなことではなくても、もし結果が思ったようにならなかつとしても、その結果というゴールまでたどり着く過程、道を楽しめばいいと思った。また、上手くいかなかったとしても、その道の中で様々なことが得られると思う。私はこのようなことを新たに気づいたことが、大きな成果だと思う。

大分県別府市 BEPPU PROJECT 安部 悠莉華(国際教養学科2年)

(インターンシップの目的)

出身であり身近な土地である別府でどのような地域活性化が行われているのか、政策などではなくアートイベントの魅力がどのようにして地域に貢献しているか実際に確認するためことが目的です。そして、自身で設定した調査については、BEPPU PROJECT がアートと身近な場所を繋げることを目標としていたため、イベントを行うにあたり地域活性化により有効な場所をどのように選んでいるかを調査しました。

(プログラムを通じて学んだこと・成果)

「ベップ・アート・マンス」の方に、アーティストは普通の人とは違う見方をすることが出来るから、町にある何の変哲もない場所にも魅力を感じる事が出来るというお話を聞きました。実際、今年の「ベップ・アート・マンス」で開催されるイベントの会場には一度は廃れてしまった商店街の空いたスペースや目立った特徴のないカフェ、保育園などが選ばれており、ただ単に目立つ場所や人が集まりやすい場所を選んでいるわけではありませんでした。しかし、アーティストの独特の感性で何でもない場所に人が集まり賑わう、身近な場所がイベント会場になって市民もイベントやアートに親近感を感じるなど、よい効果が生まれるのは事実です。またこれが出来るのも、人によって価値観が違い、どうしても捉えられる感じ方に正解のないアートイベントだからなのだと思います。アーティストは思わぬところで町を盛り上げてくれ、面白く新しい方法で地域を活性化してくれます。これからも町の活力に必要な存在だと思いました。何でもないところに面白さを見つけ出せるのがアーティストですが、それを見て自分なりにアートを楽しむのは市民です。アートの楽しさを知り、自分なりの発信方法を探す人もでてくるでしょう。プロを作品を見て、周りで行われている市民のアートイベントを見て、自分にも出来そうと思ってもらい、アートを発信する機会を与えるのが「ベップ・アート・マンス」です。プロのアーティストに盛り上げてもらうだけでなく、市民自身がアーティストになって町を盛り上げるのです。そこに住む人が主体的になって正解のないアートを楽しむのは、誰も傷つかない良い地域活性化だと思いました。



自身で設定した調査のために、「関口光太郎 in BEPPU」担当の方とアーティストの関口さんになぜ展示会場にトキハ別府店が選ばれたのかを尋ねました。地域活性化をどう意識して決めたかを聞いたのですが、会場の広さ、関口さんのアイデアに合うかなど、様々な条件に合うから選ばれたそうです。地域活性化を第一に意識して決めたわけではないようでした。また「ベップ・アート・マンス」ではイベント会場を決められない人に安

価で会場を提供するサービスがあります。その会場の選び方について質問したところ、BEPPU PROJECT が頼むわけではなく、会場主が自主的に貸し出しを申し出てくれるようです。これらより、BEPPU PROJECT がどうこうしているわけではなく、上の学んだことに書いたように、アーティストによる独特の選び方によって地域活性化が生まれていると学びました。

「関口光太郎 in BEPPU」のオープニングセレモニーで、テープカットの際に手袋とはさみを配るアテンドを務めたことです。インターンシップ先の方に「インターン生がするものじゃないよね」と言われるような仕事だし、まさかこんな大役を任されるとは思っていませんでした。ですが、制作の序盤から完成まで多く携わり、期間限定のインターン生でありながらも作品に思い入れがありました。そのためアテンドの話を頂いた時は、自分の思い入れが認められたようで、自分も「関口光太郎 in BEPPU」において大切な一人だと言ってもらえたようでとても嬉しかったです。もちろんしっかり務めは果たしました。



カナダ ウィニペグ大学 CWE  
プログラム 柳下茉璃（国際教  
養学科 3 年）



オーストリア H.I.S. Austria Travel GmbH  
西山優花（国際教養学科 2 年）



## EYH プログラム参加者アンケート

EYH プログラムには、「1 か月以上の期間、大学を離れて研修を行う」という条件があった。そうした制約の中で、プログラムを開発していくこととなった。しかし、この「1 か月以上」が、むしろより良い教育効果をもたらすことになることを知るようになるのは、実際にプログラムの運用を開始してからである。

このプログラムは、参加することで、学生自身がこれまで得てきた知識と現実世界を結びつけて考え、理解でき、行動できるようになり、ひいてはグローバルかつ地域貢献に資する人材となるようにデザインした。しかし、このプログラムは、実際に学生たちにとって良いものになっており、その後の大学での研究や、その後の人生にインパクトを与えてたのだろうか。

そこで、このプログラムの振り返りも兼ねて、卒業生を含むその時点までの参加者全員を対象に、アンケート調査を行った。この調査は、2019 年 10 月に実施した。回答率は、76% (29 名/38 名) であった。

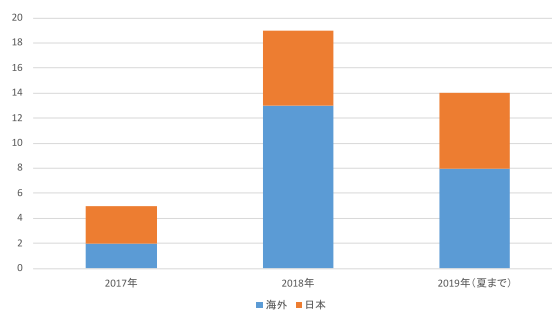
国内外の参加者数の変化については、福岡女子大学が国際志向の学生がもともと多いということもあるだろうが、海外に行った学生が当初多かった。しかし、3年目には、日程や費用、内容もあるだろうが、日本国内で良い経験をした学生たちのことを聞いて、挑戦したい学生も増え、国内外の学生数がほぼ同じくらいになっている。

参加学年については、2・3 年生が中心である。これは、学校生活に慣れてきて、なおかつ就職活動にもかからない時期を選んで、挑戦していると思われる。

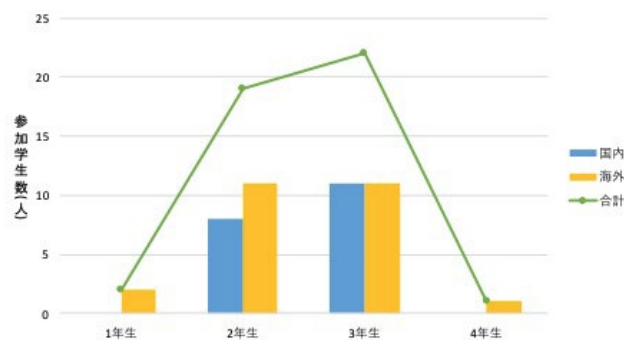
プログラムの期間は 1 か月以上から 3 か月ほどまで用意していた。学生たちの多くは、長期休暇を利用して参加していたため、1 か月以上、2 か月未満が中心であった。どんな仕事もそうであるが、1 か月ほどで仕事場、仕事内容に慣れ、徐々に自分で考えて行動できるようになってくる。このプログラムでは、実習期間を最短でも 1 か月、最長で 3 か月と設定したことで、学生自身が自分で仕事ができるようになる実感でき、受け入れ側にとっても、ただ仕事内容を伝えるだけで、学生から何かを得る前にインターンシップが終わってしまい、学生が大学に帰ってしまうということが防げ、何かしら学生からも得られるという、互いに利点があると思われる。

参加前は、期間が長いことを気にする学生もおり、興味があるがなかなかプログラムの応募

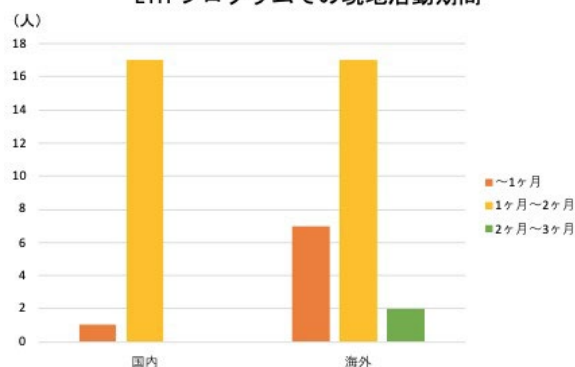
EYHプログラム参加学生の人数の推移



EYHプログラム学年別参加者数(2017-19年度)

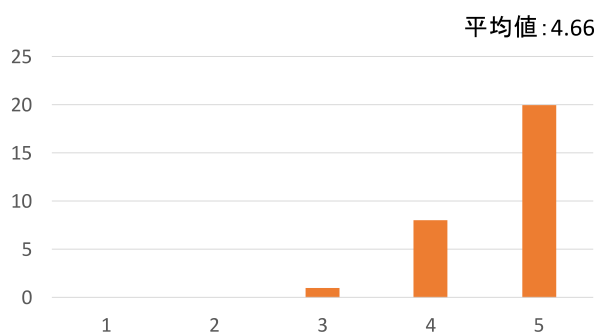


EYH プログラムでの現地活動期間



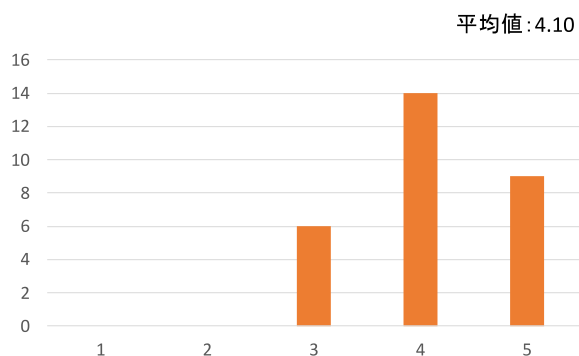
には至らない学生も多くいたが、そんな中でも、実際に参加した学生は、声を揃えて 4 週間では足りなかったと言い、ちょうど 1 か月で戻ってきた学生たちはもっと長くても良かったとの感想が出てきた。学生からの感想から得た知見としては、期間的には、1 か月以上で、尚かつ 2 か月未満であると、自分の置かれた状況も理解できる上に、自分の力も発揮できてちょうど良かったのではないかと思われる。

EYHプログラムの総合評価(5段階評価)



EYH プログラムは、事前学修、現地での実習、戻ってからの事後学修から成り立っている。参加学生に、このプログラム全体について、聞いたところ、5 点満点中、平均で 4.66 点という評価を得られた。プログラム実施直後の場合、プログラムの評価が高くなることはよくあることであるが、このアンケートは卒業生にも聞いており、参加後 2 年以上たつものもいたことを考えると、参加した学生たちには、高く評価してもらえたと思う。

参加前のEYHプログラムへの期待度(5段階評価)



まだ歴史が浅く、未知のプログラムであることを考えると、参加するにはとても勇気が必要だっただろう。そんな中、参加した学生たちが、参加前から、このプログラムに対して、大きな期待を寄せていたというのは、プログラムへの期待度が 4.10 であったことからわかる。

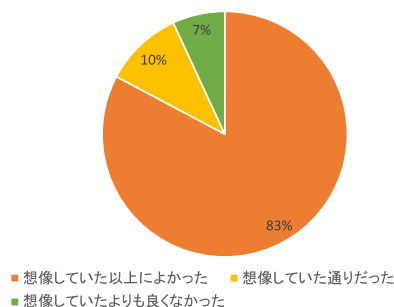
大学内に  
様々なプロ  
グラムある

ため、他のプログラムとの差別化、そして選ばれるプログラムとして、EYH プログラムを成長させていかなければならないという意識がスタッフ側にはあった。そのようなこともあり、EYH プログラムの広報には力をいれて、よいイメージを抱いてもらえるような、なおかつ参加したくなるようなフライヤーを作成した。もちろん学生たちは、どんな活動ができるか、それぞれの場所の活動内容を検討した結果、参加を決意したとも思われるが、このように、「参加したら面白そうだ、参加してみたい」と学生に関心を持ってもらうことが大切だと思い、このプログラムでは、これまでの参加者による報告会や相談会を何度も開催して、学生たちへの周知を図った。その結果、学生たちが、4 年間という限られた貴重な時間をどのように有効に使用おうかと考える過程において、EYH プログラムを、大きな期待をもって選んでくれたということは、とてもうれしく思う。



参加者の大多数が、このプログラムに対して期待をもっていたとのことだが、実際に参加してどうだったかを聞いた。結果としては、83%の学生が、想像していた以上に良かったと回答した。もともとこのプログラムに期待して参加を決めたが、このプログラムを通して得た感動や喜びが大きかったということが、この調査結果からもうかがえる。

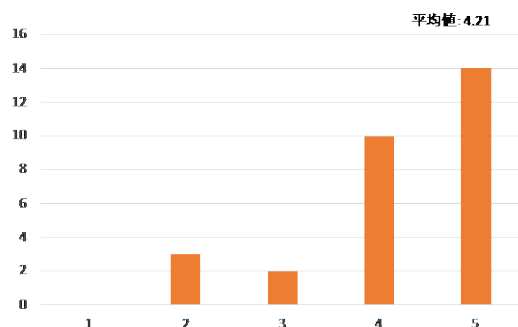
EYHプログラム参加前の期待度と比較して、実際参加してみた感想



学生たちが、このような大きな満足感を得るにあたり、大きな役割を果たしたのは、受け入れ先の企業、団体のみなさまと、一緒に活動をしてくださった地域住民のみなさまである。学生たちを温かく受け入れ、学生たちの可能性を信じ、様々なチャレンジを与えてくださったことで、大学の授業では学べない多くのことを学ぶことができ、学生たち自身も成長を実感できたことが大きかったのではないと思う。

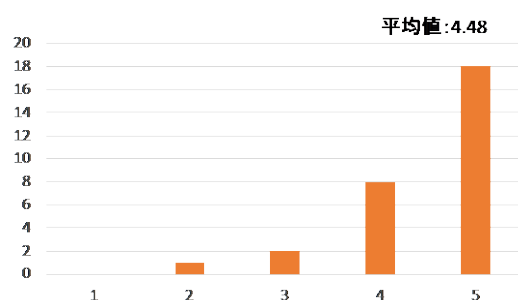
学生たちは、現地に行く前に、事前学修を15時間ほど行っていた。内容は、現地のことを知ることや、現地での活動に必要なと思われる事柄に関する調査を行うゼミのような授業を行った。現地に行ってから知ること、学ぶことはとても多いが、全く何も知らないで行くより、理論と実際を比較することや、その地域に対してや、その地域の抱える問題に対して疑問を持つ、積極的な学びにつながることから、特に事前学修は大切に行った。このアンケートで、EYH プログラムに関連する学内での学びについて役に立ったかという質問をしたが、回答した学生の平均値が、5点満点で4.21と高い数値であった。実際、プログラムに参加した学生の意見を聞いても、事前学修で学んだことが、現地で役にたったという意見が多かった。この事前学修において、調査といった関連する知識の積み重ねを行うことは、心の準備も行うことにつながる。学生たちからも、インターンシップ先の地理や文化、日本との差異を事前に自分で調査し、学んでおくことで、現地での業務や他の人とのコミュニケーションの役に立ったという声や、業務内容に関連することを調査し学んでいたことで、インターンシップ中の業務でのより深い理解に繋がったという意見が聞かれた。こうした事前学修で行う内容は、受け入れ側のニーズや、現地で行われる内容をこちら側でリサーチを行い、さらに学生の興味関心から決めている。こうした送り出す側での準備をちゃんとするにより、より高い学習効果が得られるだけでなく、学生たちの満足度も上がることにつながると思われる。

事前・事後学修は、役に立ったか(5段階評価)



そうした学外学修での成功体験は、学生たちのモチベーションを高めていることがこの調査結果からもわかった。このプログラムに参加したことは、大学におけるその後の学習、研究への意欲行動にどのくらい貢献しているかという質問に対し、5点満点で4.48であり、多くの学生たちは、大学

プログラム参加後の学業(学業のモチベーションや研究内容)への貢献度(5段階評価)



に戻ってから、それまでの自分の学びを振り返り、受け身ではない、自発的な学びにつながっていったようだ。

このプログラム参加に伴う学生たちの具体的な変化としては、自分で考えて行動する積極性の向上をあげた学生が 28%、そして特に海外に行った学生は、英語の勉強意欲・英語のコミュニケーション能力の向上が上がったという変化があったと答えた学生が 28%いた。そして、24%の学生が、こうした経験を通じて、学問をより深く学びたいという勉学の意欲向上と、こうした異なる環境での経験を経て、多角的な視点・思考を獲得したと答えた。さらに、過疎化や高齢化社会といった問題を抱える地域社会への関心が向上したと答える学生もおり、なかには実際に卒業論文で過疎地域について取り上げ、再度 EYH プログラムで活動した地域に調査に行くという学生も出てきた。行くまでは、自分に自信がないといていた学生も、自己肯定感が向上し、様々なことに挑戦することを躊躇しなくなったという声が聞かれた。

EYH プログラムは、学生が知識と現実世界を結びつけて考え、理解でき、行動できるようになり、ひいてはグローバルかつ地域貢献に資する人材の育成を目標としてきたが、学生たちの意見や、大学に戻ってからの成長の様子だけでなく、このアンケートから得られた数字からも成功が裏付けられたといえよう。

この3年間で振り返ると、EYH プログラムは学生にとって満足度の高いプログラムに成長してきたと感じている。その理由は、学生だけでなく、関わる全ての人々にとってよい経験につながるプログラムだったということがあるだろう。それを可能にしたのは、大学側と、受け入れ側の大きな協力であり、意欲ある学生たちの、これまでの学びと経験を生かした挑戦が、その受け入れ側にも良い効果をもたらした結果であると思う。

外部組織を巻き込んだ教育プログラムの企画、実施は、すべての関係者とのコミュニケーション—学生とのこのプログラムで目指す目標の共有、そしてパートナーである受け入れ側との、このプログラムのビジョンの共有—が大切であり、さらに、スタッフ側は、その目標達成のために、学生を支えていくために何が必要か、という視点を常に意識することが重要であるということに改めて感じた。こうした、「すべての関係者にとって利点が得られるかどうか」という点は、プログラムのデザインの段階から意識しておく必要があるだろう。

このプログラムを始めてから3年目、ある学生から、「このEYH プログラムに参加したい」と思い、この大学を受験した」と言われた。そのときは、本当にうれしく思ったと同時に、よい教育プログラムを提供することは、高校生にも影響を与え、ひいては大学の利益にもつながることを実感した。EYH プログラムは、学生にこれまでと異なる形で学びと、さらなる成長をもたらすだけでなく、外部の組織の方々や地域の方々も、学生たちと一緒に活動を通じて得られるものがあり、さらには高校生にも、大学でやりたいことのイメージを与えられた。そしてこのプログラムのスタッフも、学生たちの素晴らしい成長の様子を目の当たりにできた。このように、関わったすべての人々に恩恵を与えてくれるプログラムになれたことが、何よりの喜びである。

## EYH プログラム年表（2015－2020 年）

年月	出来事
2015年7月	文部科学省大学教育再生加速プログラム テーマIV（長期学外学修プログラム（ギャップイヤー））採択決定
2015年11月	AP 推進室開室、長期学外学修プログラム実施に向けた調査開始
2016年6～12月	「EYH プログラム」開発
2016年12月	AP 事業テーマIV「ギャップイヤー」キックオフシンポジウム（於新潟）にて、EYH プログラムについて説明
2017年1月	EYH プログラム 説明会
2017年3月	2017年度 EYH プログラム 参加者決定
2017年8月	2017年度 EYH プログラム
2017年10月	2017年度 EYH プログラム成果報告会、相談会
2017年11月	EYH プログラム相談会 フィンランド、福岡のプログラム参加学生によるワークショップ フィンランド写真展開催
2017年12月	AP 事業テーマIV「ギャップイヤー」シンポジウム（於新潟）参加 熊本のプログラム参加学生による杖立温泉写真展
2018年1・2月	2018年度 EYH プログラム説明会
2018年4月	2018年度 EYH プログラム 参加者決定
2018年7月	2018年度 EYH プログラム実施
2018年8月	平成30年度 AP 事業テーマIV 採択校合同会議（於東京） EYH プログラム相談会、報告会（カナダ）
2018年9月	報告会（インド）
2018年11月	AP3校合同シンポジウム「キャンパスを離れて学んだ私たちのビフォー・アフター」（福岡女子大学、長崎短期大学、宇部工業高等専門学校）開催（於福岡女子大学）
2019年1月	2018年度 EYH プログラム報告会 2019年度 EYH プログラム説明会、相談会
2019年4月	報告会（カナダ・インド） 2019年度 EYH プログラム説明会、相談会、参加者決定
2019年5月	「長期学外学修のデザインと実践」出版
2019年6月	2019年度 EYH プログラム実施
2019年10月	報告会（カナダ・インド） 2019年度後期 EYH プログラム相談会 大分のプログラム参加者によるアートワークショップ
2019年11月	AP 事業テーマIV 長期学外学修プログラム（ギャップイヤー）合同総括シンポジウム（於新潟）参加
2020年1月	2019年度 EYH プログラム報告会 福岡のプログラム参加学生による映画「えんとこ」上映会 2020年度以降の長期学外学習についての説明会
2020年3月	AP 推進室閉室

## 大学教育再生加速プログラム（AP）推進室

室長 池田 宜弘  
副室長 湯田 ミノリ  
スタッフ 森内 千佳  
仲間 陽子

## Expanding Your Horizons プログラム 担当教員

池田 宜弘（環境科学科 教授）  
馬場 優（国際教養学科 教授）  
湯田 ミノリ（共通教育機構 准教授）

## AP 推進会議メンバー

池田 宜弘  
馬場 優  
湯田 ミノリ  
庄山 茂子  
野依 智子  
新開 章司  
川邊 理恵  
太田 稔  
高原 芳枝  
和栗 百恵  
森田 健  
城 小百合  
馬場 彩  
松木 健  
西村 美乃  
森内 千佳  
仲間 陽子

## 終わりに

多くの学生たちに、良い経験をしてほしいという思いから生み出した EYH プログラムを通じて、この3年間で、のべ44人の学生の人生に大きなインパクトを与えることができただけでなく、彼女たちが活動した場所に変化をもたらしてきたことを喜ばしく思います。またそれと同時に、それに続こうとしている学生が増えていることをとても嬉しく思います。

準備期間も入れて EYH プログラムが行われた4年間の間に、社会も大きく変化しました。大学における学びの形や、社会や学生から求められるものも変わってきたこの時期に、その地域に長期にわたって暮らしながら、国内外問わず地域の方々を巻き込みながら多くのことを学ぶこのプログラムは、社会、そして学生たちのニーズに応えたものだったと思っています。ただ、まだ新しく蓄積の少ないこのプログラムに参加しようと思うのは、学生たちにとっても、勇気のいったことと思うので、この3年間、参加者数はあまり伸びませんでした。しかし、面白そう、自分の夢が叶えたい、と言ってこの EYH プログラムに参加してくれた学生たちは、その挑戦する心に応えるような、そしてさらに自分自身を豊かにする経験を得られたことと思いますし、このプログラムに参加して得られたことを、大学時代に成し遂げたことの一つとして、自信を持って他の人にも伝えることができるのではないのでしょうか。そんな勇気ある学生たちの可能性をさらに広げるお手伝いできたことを、とても幸せに思っております。

このプログラムの実現のために尽力をしてくださった受け入れ先企業、自治体、団体の方々、地域の方々に心よりお礼を申し上げます。そして AP 推進室の立ち上げから、事業を軌道に乗せ、最後まで教員や学生たちに様々な形でサポートをしてくださったスタッフの森内千佳さん、仲間陽子さんなしには、ここまで来ることは困難だっただろうと思います。本当にどうもありがとうございました。

この報告を読んで、自分の可能性も広げたいと思う学生や、学生たちの可能性を広げたいと思う教育機関が増えてくれることを願っております。

2020年3月

桜咲く福岡にて

福岡女子大学 准教授

AP 推進室 副室長

湯田ミノリ

大学教育再生加速プログラム（AP）事業

Expanding Your Horizons プログラム

2017－2020

報告書

発行日 2020年3月31日

編集・発行 福岡女子大学 AP 推進室

〒813-8529 福岡市東区香住ヶ丘 1-1-1

Tel : 092-661-2411

URL: <http://www.fwu.ac.jp/gapyear/>